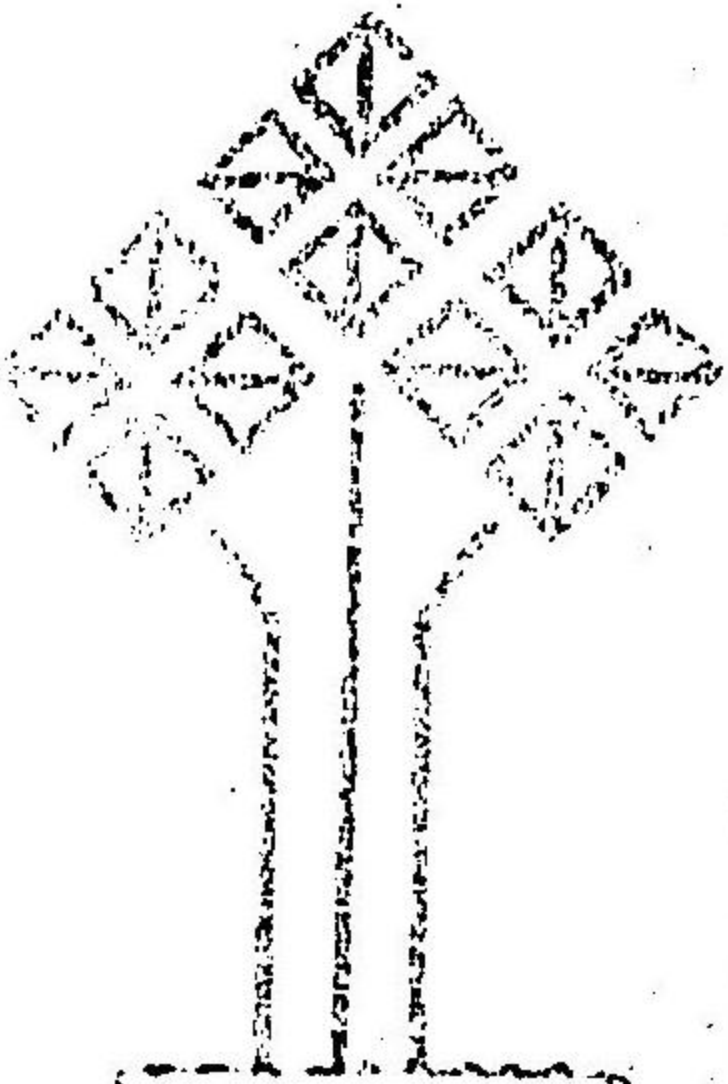
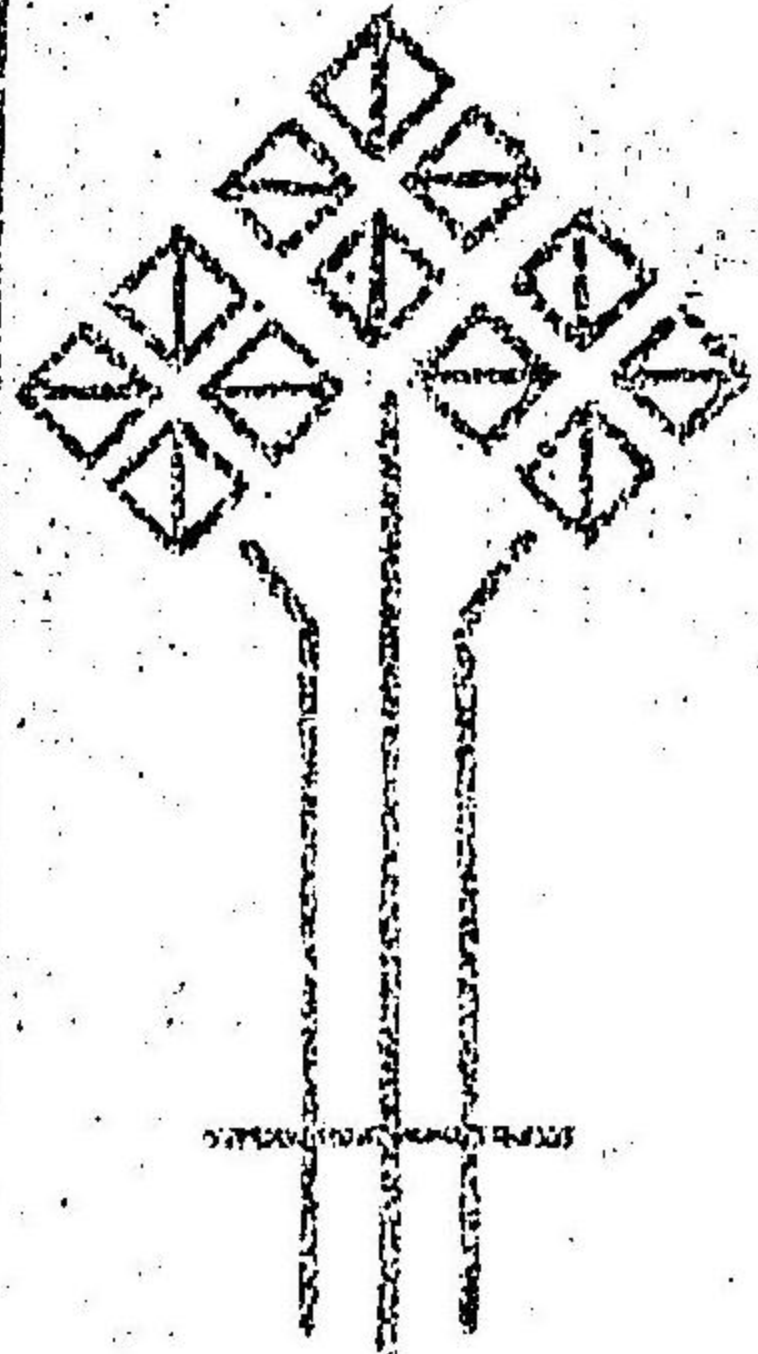


小説

荒尾讓介

異念師着



269  
122

092818-000-9

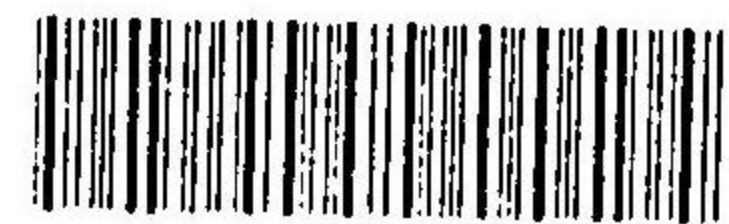
特13-113

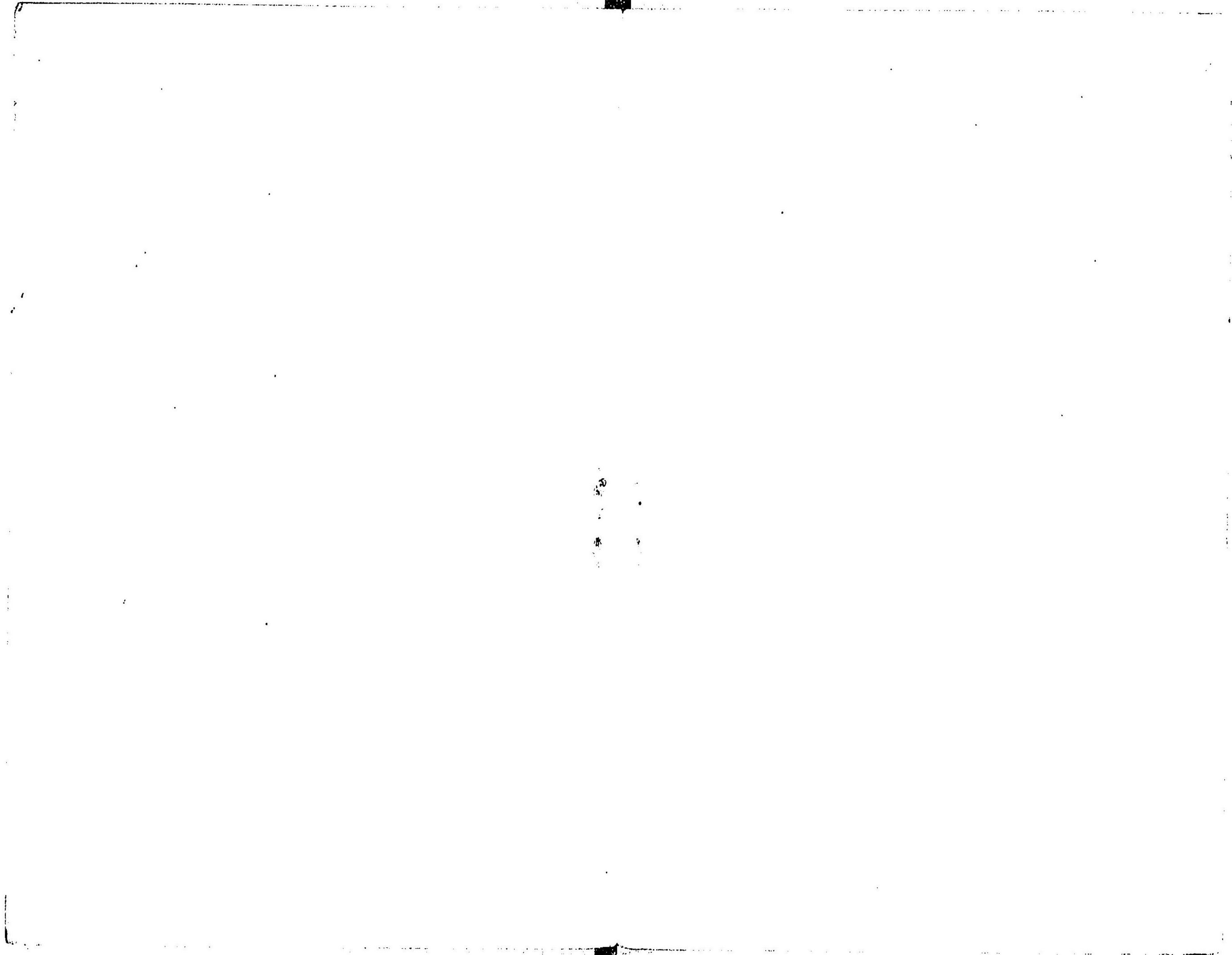
荒尾讓介

渡辺 霞亭 (黒法師) / 著

M45

DBQ-0108





特13  
113



荒尾讓介

45. 3. 26  
岡本



Vertical text, possibly a title or a list of names, written in a stylized font. The text is arranged in a single column and is partially obscured by the high contrast of the image.

# 荒尾讓介

黒法師著

(一)

荒尾讓介等を乗せた、日本周航會社の歐洲航海船順陽丸は、今  
し濃青の穩波を蹴つて、六千噸の巨體輕やかに、大平洋上を進航  
爲つゝあるのである。

時は漸く黄昏れて、遙に摸糊と望まれつゝ在つた駿遠の連峰も  
いつしか暗淡たる暮色に包まれて、往來ふ船舶は、舷燈の光點々  
として球に、船客の多くは、定めの船房に入つて、厨夫の運ぶ夕  
餐の膳に、食事の箸を把るもあれば、和洋の酒に酔を買ふもあり

下戸も上戸も、此處一時酒食の混雜に、船中の無聊を忘れるばかりである。

就中多年落魄の鬱悶を、少に酒に懣められつゝあつた荒尾は、嗜好性と成つて、酒無ければ非常に意氣の消沈を感ずる如く覺ゆるのであるが、飯朝するまでにはこの悪習を矯めやうと、自ら決心はして居るものゝ、間貫一が好意で、船中の徒然を懣すべく、用意して下れた三鞭酒が在るために、そを取出して、飽浦雅之夫婦の前途を祝福し、兼て己の嗜好を充さんとするのであつた。

彼男は昨日までも、惨々たる髯を、胸の邊まで延して居たが、今日は鼻下に短く刈り込むだ髯のみ残して、他は美しく剃り落して了つて居るので、これまで年齢老けて見えて居つたのが、俄に若々しい氣品ある紳士に見えるのである。ともすると、剃落した

髯を、在りし日の如く握らんとして、急に心附いて苦笑する事も度々であつたが、今も握らんとして自ら苦笑しつゝ、相對して食卓に就いて居る飽浦に向つて、

「飽浦さん、幸ひ間の下れた三鞭酒が在るから、君等お二人の前途を祝福すべく、一献差上げやう、君も酒は飲ける方なんぢやらう」

言ひつゝ、コップを差した。

「有難うございます、目的が成功するまでは、盃は手に爲ない覺悟で居りますが、前途を祝して下さるお盃ですから、歡んで頂戴致します。」

飽浦が快く受けた。荒尾が瓶を取上げて注ぎかけると、列んで椅子に着いて居たお鈴が、慌てゝ遮つた、

『あらッ、私がお酌を致します。』  
引取つて酌を爲た。

『私の酌よりか、貴女の酌の方が旨いちやらうよ、はゝは。』  
無邪氣に笑つたので、お鈴は初心らしく顔を染じて、共に微笑  
むのであつた。他浦も満足さうに笑ひつゝ、コップを傾け盡して  
荒尾へ返酬した。荒尾はコップを舉げつゝ、やゝ辭を改めて、

『しかし、目的の成功するまで、盃を手を爲ないと云ふ決心は、  
私も大きに賛成ぢや、そりや好きな酒なら、時と場合に依つては  
飲むだからと言ふて、差支へは無いけれども、要するにぢや、  
其だけの覺悟と決心だけは失はないやうになさるが宜いちや。  
私も酒は至つて嗜む方ぢやが、酒精の害毒は能く知つとるから  
這度の漫遊中に、成たけ節する癖を附けて、飯朝後は能ひ得べ

くんば、斷然禁酒爲やうと思つとるのですぢや。』

『彼方へ着きました上は、斷然禁酒致しまして、土に嚙り附いて  
も名譽を恢復するだけの、事業を成し遂げまして、貴下方始め  
此女の兩親へも、詫の出来る人間に成らなければ、再び日本の  
土地は踏まない決心で居りますから、どうか御安心をお願い申  
します。』

『どうか、私が飯朝するまでに、都合好く希望を成就して、今の  
航海を昔語に爲ながら、一緒に又飯りたいものぢやな。』  
言ひ了つて、飲半のコップを一息に空けて、

『さあ、這度は貴女に一つ献じやう、お酌は他浦さんに頼むで、  
はゝは。』

コップをお鈴へ差した。お鈴は快く受けたが、他浦の注がんと

するのを拒絶した。

『でも、荒尾さんは、折角私共の前途を祝して下さるお盃だから一口でも頂きなさい。』

飽浦が勧めた。

『貴女は飲めないのかな。日本酒は飲めなくても、これは旨いから飲めるぢやらう、厭なら廢すとして、お祝ぢや少し飲むで見なさい。』

『お猪口に半分位は、頂きますのですが、船にいくらか當られたと見えまして、少し頭痛が爲るのださうです。』

飽浦が辯護した。

『なるほどな、船は始めてぢやと言ふお話ぢやつたから、少し位な頭痛は結構ぢや、それならば尙の事、少し飲むで氣を興奮させ』

た方が宜いぢやらう、しかし無理には勧めないがな。』

『では折角の思召ですから、ほんの少し頂いて見ますわ。』  
快く受けて、徐に飲乾した後、荒尾へ返杯した。

『どうぢやな、此酒なら飲めない事は無いぢやらう。』

荒尾が問へば、お鈴は早も仄乎と薄紅を彩つた顔を靡りつゝ、  
『日本酒ほど苦くはございませんけれど、能く利くと見えまして  
もう這様に紅くなりましてございます。』

寢に息も苦しさうである。

『宜いぢやらう、酔ふて苦く成つたら、飽浦さんに介抱して貰へ  
るからな、はゝゝは。』

またしても愉快さうに呟々と笑ふ。其の態度が如何にも相思の  
夫婦が、鬨々として睦み合ふ態を、心から敬ぶ如く見えるのであ



る。

『真箇息が逸みまして、大變苦しく成りましたわ。』  
訴へるやうに良人を見る。

『それでは、甚だ失禮だけれど、お先へ御飯を頂いて、彼方へ往つて休む方が宜いだらう。』

『何だか御飯も頂きたくございせんから、相済みませんけれど失禮させて頂きますわ。』

『然うか、それでは御免蒙るが宜い。』

『は、は、は、到頭笑談が事實に成つて了つたな、氣の毒な暫く休むで居ると、直に酔が覺めまるぢやらう。』

お鈴は席にも堪へぬ風情で、一禮して寢床の方へ去つた。他浦は氣に懸らぬではなかつたが、荒尾の手前直にも立かねて、沈着

ぬ心を強ひて押へ、勸めらるゝまゝ、献酬の數を重ねつゝ、とにかくと前途の希望など打明けて居た。が、やがて椀を抜いた瓶の酒が盡くると共に、コップを納めて、食事に移つた。

荒尾は、瞬く間に數椀を食了つて、他浦をして健啖に駭かしめつゝ、やがて夜景を望むべく甲板へ出かけた。他浦は遅しとお鈴の氣分を伺ふのであつた。

(一一)

『江口の千家……楚雲を帯ぶ……江花亂點して……雪紛々……春風落日誰か相見ん、青翰舟中鄂君有り……』

微吟しつゝ、櫓に倚りかゝつて、浮雲に吞吐されつゝ、在る春月を眺めて、醉顔を洋上の風に委せて居るは、荒尾讓介である。

やがて彼男は撫然として嗟嘆の聲を漏すと共に、兩腕を胸上に握して、瞑目何事かを思ひ耽けるのであつた。蓋し過去の落魄を追想すると同時に、前途の光明を想到して、人事の變轉極りなく運命の浮沈涯りなきに感嘆するのであらう、

『……これも間の賜物ぢや、が彼男も青年の客氣に乗じたとは言ふものゝ、有爲の才器を惜しい事を爲たものぢやな……障害に遭はなかつたら、夙に學士に成つて、今頃は何れの方面に向つても、相當の地位を作つて居るのにな……しかしどうか病人が恢復して下れると宜いかな。』

他には聞えぬほどの聲で、咄くやうに述懐するのであつた。こは情義に厚い彼男が、間の前途を思ふと共に、お宮の全快を祈る眞の聲なのである。

空を望めば、月は折柄の雲に鎖されて、見渡す限り陸地は見えず、唯遙の彼方に、舷燈の光著く、東を差して進み往く、一巨船の見ゆるのみ、彼男はこの活畫圖にも似たる、詩趣ある光景に見惚れて、寸時は身動きもせず、瞳を凝らすのであつた。

『まあ、何て宜い景色でございませうね。』

春や今、鶯の啼音にも似たる、優しい聲音は、突如として傍近く起つた。他に人在りとも覺えざりし荒尾は、言ひ知らぬ快感を破られたので、心憎げに、聲する方を透すやうに見遣つた。夜目に確とは見分け難いが、三間ばかり隔つた彼方に、二人の人影が顯はれて、一人は体幹の高い、フロックコートを着た男で、一人は優しい聲を立てた當の女である事を知つた。けれども彼男は格別意にも留めぬ様子で、再び海上の光景に瞳を移した。彼方の男

女は、更に人任りとも心附かぬ様子で、四方の夜景を眺めつゝ、

『真箇好い景色でありますね、あの汽船の進航する起なぞは、全然水彩畫にでも在りさうな景色ではありませんか。』

『真箇畫に描いたやうでございますね。』

『しかし、不思議な場所でお目に懸りましたね、これも盡せぬ御縁でありませう、はゝゝは。』

取つて附けた如き笑方をした。

『真箇意外な所でお目に懸りましてございますね、奥様も御同行で居らつしやいますか。』

『妾ですか、妾は少しく事情がありまして、實家へ還して了ひました。』

憶面もなく言つた。

『まあ、左様でございますか、お美しい奥様で居らつしやいますたのにね……』

不審に堪へぬやう言つたが、しかし何故とは憚つて問ねなかつた。

『何う致しまして、貴女なぞと競べましたら、玉と瓦で、汗顔の外ありません。』

『あら、那麽程の宜い事を仰やいますわ、私なぞが何うして、お傍へ寄られるものでございませう……』

『それは貴女の御謙遜と言ふものです、日外宅の園遊會へお越し下さつた時、心密にお姿のお美しいのに、惚々致しました、朝野の名立たる貴夫人令嬢方は、凡そ御來會下さつた中に、一際抽出てお美しかつたのは、真箇貴女お一人でした。其の時か

ら、呼々獨身で居たらば、叶はぬまでも御結婚を願つて見るにと、甚麼に残念に思ふたか知れなかつたです、いゝえ笑談ではありません、真箇の事であります。』

荒尾は聞くともしなしに、二人の話を聞いて居つたが、可厭な奴だと、忌々しさうに見遣るのであつた。

女は、微笑に紛らしつゝ、かゝる話を避けるやうに、

『あの此度は、清國は何方へお往で遊ばすのでございますか。』  
問ひかけた。』

『上海に往きまして、都合では香港まで往くかも知れないです。』

『何か御視察にでも往らつしやいますのですか。』

『何に視察と言ふ理ではありませんが、銀行の支店が在るので、其方の監査が重なる用向でありまして、餘暇が在つたら

北清へ廻つて、貿易の状態でも視察して歸らうかと思つて居ります。』

『左様で居らつしやいますか、上海は大層佳い土地ださうでございますね。』

『商業はなか／＼盛大ですが、しかし盛大なと申しても、高が清國の貿易港に過ぎないですから、歐洲の大都會なぞとは、比較に成るものではありません。御尊父が赴任して居らつしやる、パリなどは、文明の淵源とも言はれるほどの大都會でありますから、非常に繁華なものださうです。』

『私もパリへ参りますのは、此度が始めて、ございますから、實際はまだ存じませんけれど、歐洲一二の都會だけに、なか／＼盛大なさうでございます。』

『私も歐米を漫遊爲たいと、疾うから思ふて居りますから、貴女がお一人で往らつしやるなら、御同行致したいものでしたに、實に残念千萬であります。』

荒尾は、此時意りなくも、乗船の際、狭山元輔から、富山唯繼が清國へ往くために、この順陽丸に乗込む話を思ひ浮べると共に、男の影の富山なる事を想像した。

寔に荒尾が想像に違はず、男は富山唯繼で、女は當時佛國在勤の特命全權大使栗羽子爵の令嬢、栗羽千香子である。

『私も両親と一緒に往きたかつたのでございますけれど、學校の都合上止を得ず残つて居りましたのですが、漸く卒業致しましたので、一日も早く来るやうにと、切々書面を寄來しますので、一人の航海は厭だと思ひましたけれど、この以前米國から一人

歸つた事があるものですから、ついづうぐしく成りまして、急に思ひ立つたのでございます。』

『左様々々、佛國へ行らつしやるまでは、米國に居らしたのですね。』

『はい。』

『して、這度は御両親様と御一緒に、暫く彼方へ居らつしやるのでありますか。』

『はい、豫々佛語が研究したいと存じて居りましたので、假令父が飯朝を命せられるやうな事がございまして、私だけは兩三年彼方へ留つて、勉強爲たいと存じて居りますわ。』

『左様ですか、それは結構なお考へであります。それでは。この船中を限りに、兩三年の間は、お目に懸る光榮を得られないの

でありますね。』

『嫌ですね、光榮だなどとは仰やつて、私の希望通り、留學を許して下れましたら、三年間は、誰方様にもお目に懸る事が出来ないでございます。』

『それは實に遺憾千萬です、吁々慙うと知つたら躊躇するではなかつたに、實に残念だ……』

半ば訴へるが如く、半ば泣くが如く言つて、堪へ難いやうな太息を洩なした。

『……………』

千香子は心中を解しかねて、無言のまま、其舉動を見成るのであつた。

富山は例のダイヤモンドの指環を、故らに見よがしにしつゝ、

如何にも思ひ餘つたやう、

『お嬢さん、直接に恣様な事を申上げるのは、甚だ失禮ではあります、唯今も申上げた如く、私は疾うから満身の愛情を、貴女の膝下へ捧げて居たのですが、如何でせう私の愛情をお受け下さつて、結婚を御承諾下さる事は出来ないでありませんか、自ら申すは異なるものですが、私の財産は、富山銀行の資本金のみでも、五十萬圓在ります。其他の不動産を低く見積つて五十萬圓、合せて百萬圓の財産は優に所有して居りますから、貴女に満足と與へるだけの、榮耀榮華は、十分に尙餘り有るかと思ひます、願くは私の熱情をお察し下さつて、希望をお容れ下されば、この上の光榮は無いのであります。』

熱心に口説くのである。

千香子は默然として耳を貸して居つたが、やゝ心を動かされたやう、

『それほどまでに仰やつて下さるお辭は、身に餘る光榮と感謝致しますけれど、他の事でございますれば左に右、結婚の事のみは、私の一存に決定致しかねますので、若も然う言ふ思召がございませうれば、どうか改めて父の方へ御相談下さいませう、お願い申したうございます。』

『それは勿論の事でありませう、無論御尊父へは公然相當の媒酌者をもつて、お願い申しますけれど、先づ第一に當事者たる、貴女の御承諾を得なければ、到底希望は達し得られないのでありますから、それで直接お願いするのであります。どうか貴女の御意中が承はりたいのです。』

阿るがやう、辭巧に口説く、千香子は暗にも著き嬌羞の態度を示して、

『……私のやうな不肖女は、迪も貴方様のやうな、立派なお方は……』

言はんとするを遮つて、

『それは貴女の御謙遜と言ふものです、私は權勢を恣にするだけの財力はもつて居りますが、御尊父のやうな榮爵を有つて居りませんから、結局は五分／＼ですよ、早い比較は、私の親友大黒喜一です、彼男の父は片田舎の一匹夫から身を起して、今日では日本屈指の實業家になりました、從四位勳三等と言ふ、勳位を賜りましたが、其一舉一動は、我邦の經濟界を左右するの潜勢力をもつて居りますところから、遂に喜一の妻には彼男が

藩主で在つた、光口伯爵の令嬢を貰ひ受けたではありませんか  
 ですから華族と實業家とは、誠に相應しい結婚の對照となつて  
 居りますから、貴女さへ御承諾下されば、御尊父は強ち御不同  
 意は仰やらないであらうかと思ひます、どうぞ御謙遜なく私の  
 希望をお許し下さるやう、一向お願い致します。』  
 富山の辭は漸く千香子の心を動したと見えて、頼には答ふる様  
 子もなく、如何に答ふべきかを思案するのであつた。  
 男を富山唯繼と知つた荒尾は、此場の談話を興有る事に覺えて  
 醉を醒しつゝ、耳を傾けて聽いて居た。

富山は情に熱した様子で、思案に沈む千香子の顔を覗くやう、  
 『私の希望を容れて下さる上は、結婚後如何なる我任意も認容爲  
 ます、如何なる贅澤も屹度望に任せますから、どうか御承諾が

願ひたいです。』

促すやうに言つた。この辭はやゝ傾かんとしつゝあつた、千香  
 子の心を確に動し得たと見えて、やがて頭を掻ぐると共に、

『それでは、眞箇私のやうな女を、それほどまでに愛して居て下  
 すつたのですか。』  
 差含みつゝ問ねた。

『何うして詐言なぞ言ふものですか、神に誓つて眞實を證明爲ま  
 す。』

『それが眞實で居らつしやいますなれば……』  
 『お承容れ下さるか。』

……  
 辭はなくて、少に首肯くのであつた。富山は雀躍せんばかり歡



んで、

『では、あの御承諾下すつたのですね……』

手と手と相觸れんばかり摺り寄つて、確むるやう迫つた。千香子も今は決心して、判然と承諾の旨を答へやうと、嫣然と微笑みつゝ、富山の顔を見上げた。

この刹那であつた。

『お嬢さん、其の御挨拶は暫らくお見合せになつた方が宜いでせう。』

底力の在る聲で叫びつゝ、荒尾が姿を顯はした。他に人有りとも覺えざりし二人は、この突然なる叫聲に、太く駭き周章たる態で、興覺顔に瞠めるのであつた。

(三)

荒尾は極めて沈着拂つたのもで、例の長軀を悠々と、二人の傍へ進み寄つた、而うして駭き顔の千香子に對ひ、

『餘り突然辭をかけたから、定めて吃驚なさつたぢやらうな、はゝは。』

如何にも馴々しく辭をかけた。千香子は顔を紅めながら、荒尾の顔を不審さうに眺めて居つたが、怖るゝ、

『お見逸申してましてごさいますが、失禮ながら誰方様で居らつしやいませう。』

問ねた。

『いや、貴女にはお目に懸つた事はありませんが、御尊父とは親

しく交際して居るもんです。いづれ詳しいお話は後で爲ますが左に右ぢや、御尊父の許諾を得ずに、恣まに婚約すると言ふ事は、身分ある良家の令嬢の爲べき事ぢやないです。ぢやから突然失禮ぢやとは思ふたけれど、御尊父と親くして居るものぢやから、御名譽を思ふて、お止めしたのぢや、失禮は許して下さい。」

と挨拶した。するとこの時まで、例の正方形の顔を、いと正方形にして、荒尾の顔を睨めるが如く睨めて居た富山は、傲然として荒尾に向ひ、

『私は御承知で有らうが、富山銀行の頭取富山唯繼と言ふ者ですが、唯今承はれば、君は栗羽子爵と知己の關係から、私と令嬢との婚約を妨害される様子だが、結婚は當事者の自由意志に任

するもので、両親は單に結婚の良否を判断して、監督するの義務を有するまで、絶対に反對する權力は無い筈です、況んや他人の君から、故障を受ける道理は更に無い筈ですから、打棄て置いて下れ給へ、君が何も要らざるお世話ではないか。』

腹立しさうに故障を訴へた。

荒尾は翻弄する如き口吻で、  
『君から見れば、要らざるお世話かも知れんが、私は友人の名譽のために、この令嬢へ忠告するのぢやから、君は黙つて居るが宜い。』

『いや黙つては居られない、私の婚約を妨害するのは、取も直さず私の幸福を破壊するのだ。君は友人の名譽のために、忠告すると言はれるが、私と令嬢と婚約を結べば、何故に栗羽家の

不名譽に成るであらうか、明瞭に其理由が聞かして貰ひたい。』  
肩を聳かして迫る。千香子は處置に窮して、はらくして居る  
荒尾は警乎と富山の顔を眺むると等しく、重々しい調子で、  
『明瞭に理由が聞きたい、は、は、は、理由が聞きたければ、明瞭  
に話さない事はないが、しかしそれは君の名譽のために、話さ  
ない方が宜いちやらう。』

言ひ了つて、雲間を照す月に嘘いた。富山は愈よ急込むで、  
『それでは何かね、君は私の身に不名譽の事でも在ると言ふのだ  
ね。』

『有るとは言はない、しかし有るか無いかは君の良心に問ねて見  
るが、誰に問ねるよりか、一番能く分るぢやらう。』

『君は益す不埒な事を言ふ男だね、すると私に何か私怨でもあつ

て、殊更に侮辱する意だな。』

『私怨を受けるやうな覺があるかな、未見の人から豈夫怨を受け  
る覺は無いちやらう、は、は、は。』

又しても嘲笑する。』

『では、私と結婚すれば、何故に栗羽家の名譽を傷けるか、其理  
由を聞かう、紳士を侮辱するも程のあつたものだ。』

『それほど頼みとあれば、止を得ず話はするが、令嬢の前で言つ  
ても差支へ無いかな。』

『富山唯繼は、未だ天地に對して愧る如き行爲した覺は曾て無い  
から、何人の面前でも厭はない、早く其理由を聞かう。』

『天地に對して愧る行動はない、立派の紳士ぢや……其立派な紳  
士が、栗羽令嬢に對するが如く、禮を厚くし、辭を卑くして、

結婚した愛妻の有るに拘らずちや、内を外にして花柳界に入浸り、賤業婦を相手に鼻毛を讀ました揚句、ヒステリー症に罹つた妻を、強ひて精神病院へ入院させて、其不在中に、賤業婦を落籍して家に連れ飯り、發狂した正妻を遂に離縁して了つても天地に愧づる行動ではないちやらうか、他は何にも知らんと思つとるちやらうか、天知る地知る、我も他も知つとるちや、現在君が此行も、如何なる事情で清國へ往くのか、他は誰も知らんと思つとるちやらうか、私は秘密を知つとるちや、栗羽令嬢に婚約を留めたのも、畢竟かゝる君の秘密を知つて居るからちや、これだけ言つたら、思半に過る事があるちやらう、何うちやな。』

言ひ了つて冷かに眺めた。意外の事實を指摘された富山は、先

の傲然たる態度は、掻消す如く失せて、今は寧ろ荒尾を畏るゝがやう、語調すら更めて、

『なるほど君の言はれる事實は無いではなかつたけれども、それには色々事情が有つて、決して妻を蔑ろにして然う言ふ事を爲たのではありません……』

苦しさに辯解を試みかけた。荒尾はそれを遮るやうに、  
『辯解は聞かんでも宜い、私は何も彼も能く知つて居るから、決して他の非行を發きたくは無いのちやが、君が強請するから一二を言つたまでの事ちや……唯無垢の令嬢が、君の先妻の如き不幸の境遇に陥るのは、如何にも氣の毒じやから、それを援けるために言つたのちや。』  
宣告するが如く言つて、更に千香子に向ひ、

「何うです、私が婚約の邪魔をした理由が解りましたか。」

千香子は、先刻から荒尾の辞を熱心に聞いて居つたから、己が輕卒を耻づると共に、其好意を感謝するやう、

「能く了解致しましてございます、お辞に従ひまして、両親へ相談した上で、御挨拶致すでございます。」

更に富山に對つて、

「富山さん、どうか悪しからずお免し下さいまし……。」

富山はいと面目なげに、

「いづれ、改めて御尊父へお願ひする事に致しませう、それは左に右です、如何であります、御一緒に船室へ歸らうではありませんか。」

「はい、どうか一脚お先へ、私は今暫く海上の景色を眺めまして

「左様でありますか、では一步お先へ失禮致します。」

荒尾へは挨拶もせず、靴音高く去つて了つた。荒尾は、親友の怨を幾分か報ふた如き心地を覺えて、其後姿を見送つて、密に笑を禁じ得なかつた。

千香子は面羞さうに、

「つい浮々と輕卒な事を致しまして、誠に面目次第もございません、どうか此場の事はこれ限り、秘密にお願ひ申します。」

「決して御無理はないですよ、私はあれなる櫓の影で、最初からの談話を残らず聞いて居りましたが、あれほどに言つて口説かれては、貴女ならずとも、如何なる女でも承知するでせうよ。

しかし彼の際、婚約を承諾された以上は、もう萬事事休すぢやからな、女にかけては蛇のやうな男ぢやから、なか／＼破約な

ぞ承知するものぢやない、一生悪運命に弄そばれなきやならな  
いから、それでお留めしたのぢや、必らず悪く思はないで下さ  
い。』

『どう致しまして、然う言ふ品性のお方ではないと信じて居たも  
のですから、御親切のお辞に絆されまして、ツイ淺墓な量見を  
出したのでございますが、お蔭で救ひましてございます。して  
失禮ながら、貴方様は誰方様で居らつしやいませう、お差支へ  
がございませなければ、お聞かせが願ひたう存じます。』

『私ですか、私は恠う言ふ者ぢやが、實は御尊父と友人ぢやと言  
つたのは、一時彼男を説伏するための方便で、全く一面識も在  
るものぢやないですよ。尤も這度佛國へ往きますので、某知己  
から紹介狀を貰つて居りますから、彼地へ往つたら、是非御面

會爲たいと思つて居りますぢや。』

恠く言ひつゝ、一葉の名刺を渡した。千香子は名刺を頂いて后  
眺めて居つたが、丁度月が雲間に隠れた時であつたので、定かに  
讀む事が能はなかつた。ために其まゝ懐中へ納めた後、

『それでは貴方も佛國へ往らつしやいますのでございますか。』

『然うです、巴里へ往くのです。』

『左様で居らつしやいますか、私は只今お聞の通り、供をも連れ  
ず、一人で參るのですから、何分宜しくお願ひ申します。』

『行届くだけの事なら、何でもお世話を爲ますから、遠慮なく言  
ひなさい、只御注意までに言つて置きますが、お一人で往きな  
ざるのは、其意氣寔に壯とすべきぢやが、お一人と言ふのを奇  
貨として、富山のやうな社會の毒蟲が刺しますから、迂濶交際

はなりませんよ。』

『有難う存じます、以來は必ず注意致すでございます。して、佛國へは永く御滞在で居らつしやいますか。』

『二三年は居る覺悟で居りますぢや。』

『では、何か御研究に往らつしやるのでございますか。』

『古く成りかけた頭腦を、洗濯しやうと思ひましてな……は、は、は。』

かゝる談話の折柄、飽浦が上つて来て、

『如何です、良い月でございますね。』

辞をかけたながら進み寄つた。雲間の月は再び甲板上を隈なく照して居る。荒尾は早くもそれと知つて、

『お、飽浦さんか、妻君は何うちやな、もう気分は快いかな。』

『はい、お庇様で、漸く快く成りましてございます。』

言ひつゝも、殆ど相對して居る千香子の姿を、不審さうに眺めて居た。千香子は辞の断れたのを幸ひ、

『では、私はこれにて失禮致しますが、貴方の船房は何方で居らつしやいませうか。』

問ねた。

『然うですか、それでは徒然の際は、些と遊びにお入來なさい、私の船房は、上甲板の船尾に當る、二等船室であります。失禮爲ました。』

『いづれお伺ひ致します。御免下さいまし。』

激かに挨拶して去つて了つた。飽浦は其姿の消えると共に、

『お知己の方で居らつしやいますか。』

問ひ試みた。

『何有一面識も無い方ぢや。』

事も無げに答へたので、飽浦も深くは問ねやうともせず、

『左様でございますか、實は餘りお飯りが無いものですから、心配致しまして、一寸御様子伺ひに参りましてございます。』

『はい、それはお氣の毒ぢやつたな、酩酊して居ると、甲板の上は危険ぢやからな。心配されるも無理はない、餘り四圍の夜景が美しいものぢやから斗らず時間を過したのぢや、どうやら酔も覺めたやうぢやから、船房へ歸つて、面白い話でも爲やうかな。』

『是非お聞せが願ひたいものです。』

『妻君が淋がつて居るぢやらう、では歸らうぢやありませんか。』

(四)

船房へ歸つた荒尾は、巻蓑を喫しつゝ、傍に控へて居るお鈴を見て、和かに笑ひながら、

『あれほど弱からうとは思はなかつたものぢやから、勧めたけれども、お氣の毒ぢやつたな……しかし女は其方が宜いので、飲まずに済むものなら、飲まない方が宜いですよ、もうすつかり氣持は快くなつたかな。』

『はい、もうすつかり快くなりましたしてございます、あんなに強く當らうとは思はなかつたものですから、すつかり頂いたものですから、ツイ酔ひましてございます。』  
今更に頬の邊を撫でるのである。



「お蔭で介抱させられました。は、は、は。」  
他浦が愉快さうに笑ふ。

「新婚旅行匆匆、介抱爲たりして貰つたりするのは、互の愛情を深くするもので、謂はゞ夫婦の親みが厚くなるのぢやから、君等のために、却つて幸ひぢやつたかも知れんな、は、は、は。」  
荒尾も愉快げに笑つた。お鈴も嬉しさうに微笑むのであつた。  
ところへ、船の給仕が、白葡萄酒を一ダース、重たげに提げて来て、

「荒尾さんと仰やるのは、誰方さんでせうか。」  
と問ねた。

「荒尾は私ぢやが、何か用かな。」  
問ひ返した。

「左様ですか、此品を栗羽さんから差上げて下れと仰やいました。ごさいますから、持つて参りました。先刻は失禮致しましたと宜しく仰やいました。ごさいます。」  
件の葡萄酒を前に出した。

「然うか、それは氣の毒ぢやな、いづれお目に懸つてお禮を言ふから、遠慮なく頂戴しますと、宜しく傳へて下れ。」

言ひつゝ、ポケットを探つて、五十錢銀貨一箇を出して與へた。  
給仕は頭を低げて立去つた。

「御懇意なお方でも御同船してお居で、ごさいますか。」  
他浦が問ねた。

「何に懇意な者も何にも同船しては居らんぢやが、先刻君に面白い話を聞かせると言つたのは、これぢやよ。この葡萄酒を下

れた當人の話ぢやよ。』  
和々しながら言つた。他浦夫婦は奇らしさうに、荒尾の顔を成りつゝ、

『どうかお話を願ひたいものですね。』

荒尾はシガーを悠々と喫しつゝ、

『意外な事が在るものぢやないかな、先刻君が私と一緒に居つた女を、知つた人かと聞かれたじやらう、甲板の上で……』

『へい、彼の美しいお嬢様！』

『あの令嬢が、即ちこの葡萄酒を下れた當人なんぢや、不思議ぢやらう……しかも今夜初めて會つて、僅か半時間ばかり話をしたばかりぢやよ。が、君達は何がためにこの葡萄酒を下れたと思ふか。』

恩人間から、謙嚴尊祟すべき人と、呉々も言ひ聞かされた荒尾の事とて、他浦夫婦は判断に苦む餘り、唯顔のみ噴めるのであつた。

荒尾は破顔一笑して、

『何うちやな、推定が就かないかな。』

『へい、何うも更張り想像が就かないでございます。』

『豈夫この戀カラな私に、那麼美しい女が懸想する柄ぢやなしなは、は、は。』

『それは何ともお受合申されませんでございますよ、御自分で戀カラだと仰やいましたも、何うお見受申しても、申分のない紳士で居らつしやいますもの……』  
お鈴が眞面目に言つた。

『うむ、それはお前の言ふ通り、お受合は申されないね。』  
飽浦も笑ひながら加勢した。

『は、は、私も一生に一度女に惚れられて見たいと思つて居るが、お鈴さんの想像とは全で筋違ぢやから可笑いぢやないか。實は恠う言ふ理由なんぢや、お鈴さんは、御存じないぢやらうが、飽浦君は、問の家に居られたから、知つて居られる筈ぢやが、お宮さんが嫁附いて居た富山な……』

『へい、富山唯繼。』

『御存じぢやらう。』

『問さんから承はりました、噂だけは能く存じて居ります。』

『あの富山唯繼が、この船と一緒に乗つてるのぢやよ。』

『へえ、然うでございませうか、………何方へ行くのでございませう。』

『う。』

駭いて眼を睜はつた。

『上海とかへ往くと言ふのぢやが、それも事實か何うか知れんのだ。』

すると此時、室の一方に横になつて居た、乗客が、俄に耳を欬て、聞くのであつたが、三人は心注かぬ様子であつた。

筆の序に記して置くが、二等室は四人詰に極つて居るので、荒尾等三人の外に、未見の相客が居るのである、それが今一同の話に耳を欬てた其人であるのだ。

『して、何處かでお會ひなさいましてございませうか。』  
飽浦が問ねた。

『私はこれまで一度だつて會つた事がないから、富山が何れぢや』

か、一向に知らんけれども、意外の事からして、偶然會つたの  
 ぢや、いや會つたばかりぢやない、大いに油を絞つて遣つたの  
 ぢやが、しかし富山は、私を何者とも知らなければ、姓名も知  
 らんのぢや。それが彼の美人に關係して居るのぢやよ。」  
 『へい、成程面白さうなお話でございますね、どうか詳しいお話  
 が承はりたいものでございます。』

『いや、大いに聞かせるよ、抱腹絶倒に絶へん、愉快な話ぢやか  
 らな。』

又シガーに火を移した。而うして悠々と、富山と栗羽千香子と  
 が、婚約を結ばんとした問答の模様から、富山が財産を餌に、千  
 香子の心を動かさんとした、熱心の辞遣、遂に千香子が結婚を承  
 諾せんとした刹那まで、例の莊重な口調ながら、時に諧謔を交へ

時に滑稽を加へて、詳しく物語つた後、

『其承諾を與へんとした刹那へ私がノツソリと出て、破談を勸告  
 したのぢや、見ず知らずの人間が、意外の所から姿を現はした  
 のぢやから、富山も駭けば、令嬢も駭いて、不思議相に私の顔  
 を眺めて居つたが、私が令嬢へ兩親の許を得た後に、婚約を結  
 ぶが宜いと、破談を懲懲したものぢやから、不審ながらも令嬢  
 が躊躇して居ると、富山は烈火の如く立腹して、何故に他の婚  
 約を妨害するかと、非常な權幕で喰つてかゝるのぢや、富山の  
 怒るのは、當然の事で、少しも無理はないけれども、間が一生  
 を過まつたのも、彼男がために許嫁の間であつた、お宮さんを  
 奪はれたからぢやし、其お宮さんも、病氣に罹つて以來、非常  
 の虐待を受けた事を知つとるもんぢやから、無垢の令嬢が、富

山のやうな陋劣漢に欺かれて、お宮さんのやうな覆轍を學ぶも  
 策の毒ぢやと思ふたし、間のために、酬て遣るも妙ぢやと考へ  
 たので、假に私が令嬢の殿父と懇意な間柄じやと言ふて、栗羽  
 家の名譽のために忠告するのじやと言つたものじやから、益々  
 富山が憤慨して、私と婚約を結ばれたら、何故に栗羽家の名譽  
 を汚すかと、青筋を立て、談判するのじや、此處等で一番毒氣  
 を抜いて遣らうと、お宮さんを虐待した事から、入院の不在中  
 に、賤業婦を落籍して、同棲した事を、手酷く攻撃して遣つた  
 ところが、有樂の破産取返も、一縮みに降伏して了つたから、  
 令嬢に尙も諄々と忠告したところが、令嬢も悟るところが在つ  
 たと思えて、富山に向つて、結婚の事は公然父へ相談して下れ  
 と断言して了つたものじやから、富山も始めの脱兔的に引替え

て、悄悄たる事處女の如く、己の船房へ向けて立去つて了つた  
 のじや、其後で令嬢に向つて、殿父と知己でも友人でもない旨  
 を、辯明しとる處へ、君が來られたのじや、この葡萄酒も、畢  
 竟その謝意として贈られたのじやらうが、富山と言ふ奴は、酒  
 色を漁るのを務めのやうに心得て居ると見えるが、小人玉を抱  
 いて罪ありじや……財産が在るから、罪を作るので、今に彼男  
 の運命も極るじやらうが、思へば惘然なものじやな。』

飽浦夫婦は感興を覺えて、執心に聴いて居つたが、始めて我に  
 復つたやう、

『誠に愉快極まるお話を承はりまして、覺えず膝を進めました、  
 間さんがお聞きになれば、甚麽にお歎びなさいますやら早くお

知らせ致したいものです、然う言ふ面白い芝居が始まると知つて居りましたら、早く出かけて、富山の顔が見させて頂きたいものでしたね。」

「真箇見せたかつたよ、彼男が其時の顔と言つたら、繪にも描けない妙な顔じやつたからな。」

「私はまだ詳しい事情は存じませんが、間さんを苦めた方が那樣目に遭つたかと思ひますと、誠に快い心地が致しますわ。」

お鈴までが歎んだ。ところへ突然、  
「愉快極まるお話を傍聴致しまして、覺えず拳を握りました。甚だ突然で失禮ですが、御免なすつて下さいまし。」  
と、三人の前に姿を現はしたは、同室の相客であつた。

## (五)

荒尾を始め、一同はこの相客の上に、言ひ合した如く視線を注いだ。見れば年頃三十前後で、色の小白い圓顔の男で、結城袴の袴の上に、白縮緬の兵児帯を前結びにして、十八金らしい時計の鎖を巻付けて居る。打見た様子から推定すると、遊人か、相場師か、若くは土木工事の受負師か、いづれ堅氣の人でない事は争はれぬ風俗に證されてゐる。

「同じ室に乗り組ながら、まだ御挨拶も申さなくて、お話中へ飛び出しまして、甚だ御無禮ではございますが、袖振合ふも他生の縁とか申しやすから、無作法の段は眞平御免を願ひやす。私は粕壁三五郎と申しやす、土木業者でございやすが、唯今旦那

がお話の富山には、忘れられない恨みがございしますので、餘り小氣味宜いお話を聞かしまして、覺えず飛び出したのでございやす。」

無禮を謝して挨拶した。

荒尾は快く微笑を湛へて、

『は、それじや君も富山唯繼を知つとるのじやな。』

『知つてる段じやございやせん、這度慙うして清國へ往きますのも、謂は、彼奴のお蔭見たいなものでございやす、任意になるものなら、十分腹癒せが爲たいほどに思ひますが、法律が恐るに然うもなりません、眞箇忌々しくて堪らないんでござんす。へい。』

『餘程怨みが在る様子じやが、一体何がために那樣に怨むんじや

な。』

『どうかまあお聞きなすつて下さいまし、恚う言ふ譯でございやす。』

言ひつゝ、空椅子へ腰を掛けた。一同は興ある事に覺えて、耳を澄すのである。外は波浪穩かに、舷端を洗ふ音が、ばたりくと響くのである。

『耻をお話し申さなきや、事情が分らないんでござんすが、私は以前鈴木組と言ふ、土木請負業の手代を勤めてゐた者でござんすが、主人が目を懸けて下れまして、昨年の春五千圓の資本金を貰ひまして、獨立して營業する事になりましたから、どうか立派な請負人になりたいものだ、一生懸命に働いて居ります中に、或時仲間同志の宴會で、赤坂の三河家へ往きましたとこ

ろが、來合してゐた藝妓の中に、春木家のぼたんと言ふ妓が居りまして、飲過して苦むでゐた私の介抱を、懇にして下れたのが縁の端になりまして、一度二度と、時々招んで遣る中に、段々關係が深くなりまして、後には大事の家業も其方除で、夜盡なしに遊び盡しまして、其結果は夫婦約束までしまして、堅い約束證さへ取交す間になりましたが、何しろ家業を忘れて、馬鹿を盡してゐたもんですから、五千圓の資本金も、段々使ひ棄てまして、僅か千圓足らずに減らして了つたのでござんす。これは大變な事をしたと、家業の恢復を斗らうと思ふ矢先へ、現はれたのが、彼の富山の野郎なんぞござんす、藝妓も多いのに好みに好んで、ぼたんを揚げ詰めにして、到頭紙幣の威光で、心に従はして了つたものと見えるんでげす。」

尙ほ語を續け。

「それから散々馬鹿遊びをした末に、八千圓と言ふ大金を出して落籍して了うと言ふのです。其事が耳に入つたものですから、女を招んで問ひ詰めたところが、私は可厭だと言ふのだけれど養母が何でも彼でも承知しなきやならないと、無理往生させやうとするのだから、何うか八千圓の金を出して、落籍して下れろと、恚う言ふのでござんす。けれども元々五千圓の資本よりか持たない者が、散々費つた揚句ですから、八千圓は愚な事、一千圓の金子だつて覺束ない懐合になつてゐるもんですから、到底金子は出來ないと言ひ切つて了ひますと、それでは養母が無理にも富山の望み通り、往生させるに極つて居るが、それでも宜いかと言ふのです。私も夫婦約束まで取交した中ですから



残念でならなかつたけれども、豊夫男を賣る家業をして居りながら、悪智恵を入れて、足拔なぞもさせられず、止を得ず指を噛へて、富山に奪はれて了ひましたが、これと言ふのも、私に金子がないから、思ふ女を奪られたんだから、一番金子を作つて、見返して遣らうと、兄弟分が上海にゐるのを幸ひ、急に清國へ往つて一稼しやうと思ひまして、慙うして貴方方と同船する事になつたのでござんすが、富山の事を思ひ出すと、胸が煮返るほど忌々しくて堪らないでござんす。だものですから、斗らず御愉快なお話を聞いたので、胸の溜飲が下つたほど嬉しくて、ツイ飛び出したやうな理でございやす。』

『は、然うかな、それでは彼のぼたんとか言ふ女は、貴方と然う言ふ中じやつたのか、それはお氣の毒じやつたな。が、其女は

もう富山に愛想を盡かして、逃げ出して了つたと言ふ事じやが貴方はまだ御存じないかな。』

荒尾が言つた。

『え、ッ、逃げ出しましたつてね、私は只今承はるのが始めてござんすが、それは事實でござんせうか。』

『私も現在を見た譯じやないから、斷言はしかぬるが、某確かな人から聞いたのじやから、大抵間違ひはあるまいと思ひますじや。』

『へえ……然うでござんすか、股合喉にしても、胸の痞が下つたほど快い氣地でござんす、私の一念だつて、満足に添つてゐられやう理がござんせん、してぼたんは何うしたでござんせうかお聞及びは無いでござんせうね。』

『それまでは聞かんどやつたが、いづれあ言ふ社界の事じやから、又勤めに出るんじやらうよ。』

『それに致しまして、八千圓も出して受出した女を、能く富山が断念めましてござんすね。』

『彼男も断念めなきやならないやうな、運命が回つて来たのじやらうよ、奢る者久しからずじやからな、は、は、は。』

『さう、今日横濱の停車場で、此女（お鈴）の来るのを、狭山さんと二人で待合して居りますと、洋装した二人連の男が、頻りに富山の話をして居りましたが、其話の様子では、何でも株式の相場に手を出して、除ほど傷手を受けたやうな話でございましたが、眞箇お辞の通り、驕る者久しからずでございます

ね。』

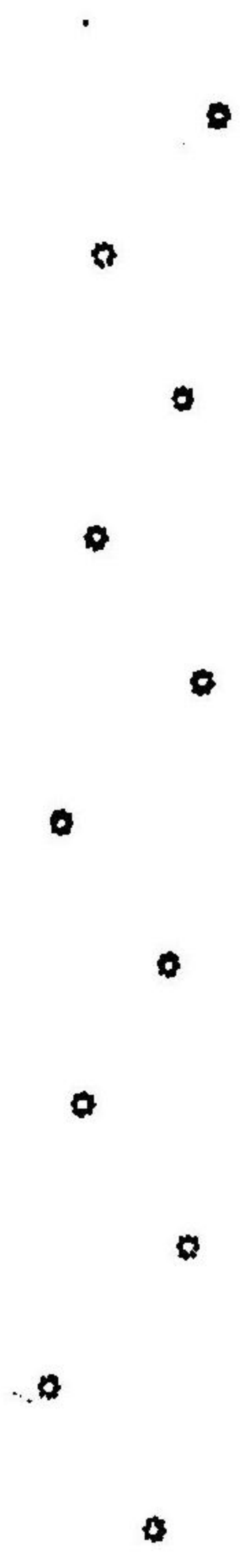
『那麽莫迦の有たけを盡して、何うして安穩でゐられるものか、彼男は其名の如く、親から譲られた財産を、只失くなさないやうに繼いで居れば宜いのじやが、有るに任せて放蕩の有たけを盡すものじやから、それで然う言ふ運命を作り出すのじや。しかしあ言ふ男は、財産を持たせて置くと、社会に害毒こそ流せ、利する事は少しもないのじやから、寧ろ蕩盡して了つた方が、一身のためにも、社会のためにも宜いちやらう。しかし、私は要らざるお切介した、めに、葡萄酒の贈物を受けたから、話を聞いて貰つた代りに、これでも御馳走するとしやう、お鈴さんお世話ぢやが、栓を抜いて下さらんか。』

『はい、畏りましたでございます。』

やがて一同葡萄酒の杯を擧げるのであつた。

(六)

荒尾讓介等に乗せた順陽丸は、六千噸の巨艦を、今し香港波止場に錨を下した。彼等一行が航海中の話柄の中心となつて居つた彼の富山唯繼も、又富山を仇敵視して居つた、粕壁も、共に上海で上陸して了つたので、其後は、彼の栗羽千香子が、毎日に訪れて、荒尾は固より、飽浦夫婦とも、いと親しく打語らふ間柄とはなつた。ために船中の無聊を慰め合つて、無事に此處まで着したのである。



香港の日本領事館には、荒尾や間が同窓の學友たる、蒲田法學士が領事を奉職して居るので、飽浦夫婦の前途も、この蒲田へ托さうと言ふのが、荒尾の意見であつたために、寄港中の時間を利用して、この大任を果すべく上陸する事に決定して居つたのである。ために着港するが否や、荒尾も飽浦夫婦も、先づ千香子に別を告げて上陸したのである。

豫て電報に依つて、荒尾の寄港を承知して棧橋に出迎へてゐた蒲田鐵彌は、荒尾の顔を認むるが否や、如何にも懐慕しさうに、

「お、荒尾君……」

感極つたやう握手した。

「お、蒲田君、能く迎へに来て下れたな。」

荒尾も懐慕しさうに握り返した。

『左に右船は、今夜の十二時でなくちや出船しないから、領事館へ歸つて、悠々話す事にしやう、迎への馬車が待つて居るから……』

『別後の物語もある、頼まなきやならない事もあるから、暫時お邪魔はするが、私は他に二人の同伴者があるのじや、馬車に四人は乗れないじやらうな。』

『然うか、それでは貸馬車もあれば、俵もあるから、直に命する事にしやう。』

『どうか、さう願ひたいもんじや。』

荒尾は、他浦夫婦を簡短に紹介して、直に二輛の馬車を駈つて領事館へと着いたのである。

かくて四人は、樓上の客室へ入つた。席に着くが否や、荒尾は

蒲田に向つて、

『私の身の上話は、後廻にするとして、劈頭第一に君に頼まなきやならない事があるのじや、それは他の事ではないが、同行したこの兩君の事じや、この兩君は、仔細あつて内地にゐると面白くない事情があるので、暫時外國へ往つて、何か事業をしようと言つて、私と同行されたのじやが、幸ひ君が當地にゐる事を承知して居つたものじやから、これは君に相談するに限ると考へて、君を唯一の目的にして來たのぢやがな、兩人の身元は私が保証者になるからな、どうか、君が相談相手になつて、何事業でも宜いから、成功しさうな事業を始めさせて下れないか尤も資本金は澤山にはないが、三千圓ばかり持つて居られるのぢや、これが暹回當港へ寄る第一の用向なんぢやが、何う言ふ

もんぢやらうな。』

蒲田は寸時考へて居つたが、

『咄嗟の間に、これと言ふ具體的の挨拶はしかねるけれど、然う言ふ事情であつて見れば、左に右我輩が責任をもつて、相談相手になる事にするから、君は安心するが宜い。』  
快諾の旨を答へた。

『それで先づ一安心したと言ふものぢや、飽浦君聞かるゝ如く、蒲田君が引受けて相談相手になつて下れる事になつたから、能く相談して活動されるが宜い。』

『有難う存じます、一方ならない御厄介に預りまして、お禮の申し上げやうもございません、只此上は蒲田さんのお指圖に従ひまして、貴方が御歸國の際までには、成功の緒に就きまして、

それをせめてのお土産に致したいものでございます。』  
更に蒲田に向ひ、

『委細の事情は、緩々申し上げますけれど、何分にも貴方様お一人が便なんでしょうございますから、宜しくお引立の程お願ひ申し上げます。』

『これだけの土地だから、何を始めても、方法さへ宜ければ、屹度成功すると思ふから、何れ緩々相談する事にしませう。』  
『何分にも宜しくお願ひ申します。』

『さあ、さう飽浦君の身の上が極つたら、遠度は私の物語に移らうかな。』

荒尾は微笑みつゝ言へば、

『うむ、大いに聞かなさやならないが、一体何う言ふ事情で、俄

に發展したのぢや。

『定めて電報を見た時は、驚いたぢやらうな、極印附の貧乏人が歐洲漫遊と言ふのぢやからな。は、は、は。』

『眞箇、駭くも駭いたが、しかし誠心誠意から歡ぶ事も歡んださ雷に君のためのみならず、國家のために、改めて祝意を表するよ。』

『有難う、實に私も一生甘んじて、窮粗大で終る決心ぢやつたが斗らずも、學生時代の恩人から、再び救けられて、漸く多年の窮境を脱する事が能ると同時にぢや、荒むだ頭腦を養なつて來るが宜いぢやらうと勧められて、遂に此の行を思ひ立つたのぢや。』

『然うか、それは何よりの幸福だつたね、實は別後我輩は、外交』

官となつて、始終海外へばかり出てゐるものだから、同僚の動靜も詳しく知る事が能なくて、時々友人の書信に依つて、幽に知つてゐる位のものだから、従つて君の近況なぞも、眞箇明瞭には知らなかつたけれども、參事官を辞して、餘り裕かならざる生活をして居る事だけは、仄に聞いて居つたが、一体何うして官海を去つて了つたのだ。』

『官職を辞した理由か、それは恩人のために、止を得ず殉死したのぢや。』

『君の事だから、大抵さう言ふ事情が在つたのだとは想像してゐたけれども、立派の器を、空しく埋めて置くのは、君個人のためよりか、國家の損害だと思つて、同僚を思ふ度毎に慨嘆して居つたのだが、昨朝電報を手にした時は、實に愉快に堪へられ』

なかつたよ。して這度は歐洲は何方へ行く意だ。」

「先づお心安い、巴里へ行く考へで居るのぢやが、都合に依つては英京に移るかも知れないのぢや。」

「滞在の豫定は……」

「三ヶ年の豫定ぢや。」

「然うか、それは結構だね、羨望に堪へんよ、定めて目的が在つて行くのだらうが、只管成效を祈るよ。」

「兩三年頭腦を作へて見て、それから立脚地を定めるのぢやから前途遠慮さ。は、は、は、時にもう一つ君に歎んで貰はなきや、ならない事があるのぢや、それは外でもないが、私が弟のやうにして居つた、問貫一を知つとるぢやらう、非常に頭腦の宜い眉目秀麗な……」

「知つとるとも、女の事かなんかで行術を晦ました、彼の間だらう……」

「其の間ぢや、彼男は其後杳として消息を知らせなかつたが、知らせないも道理で、すべき事業も有るであらうに、高利貸の手代になつたのぢや。」

「言ふを遮つて、」

「いや、其高利貸で面白い話があるのだ。」

「言ふを引取つて、」

「君が嘉納流のお手並で、腕力の制裁を加へた上に、借用證書を没収した一件ぢやらう。」

「それを何うして……」

「間から詳しく聞いたよ、三百圓かの證書を巻上げられて了つた」

ので、主人へは自分から辨償したと笑つてゐたよ……ところ  
 が彼の間が、私が迷ひを説破して遣つたところが、翻然と改悛  
 して、高利貸を廢めたのみならず、高利から得た金は、悉く獎  
 學金として寄附をする、現在手に有つた債權證書は、債務者へ  
 悉く返して遣る。尙其上に彼男や、彼男が主人であつた者のた  
 めに、今日窮地に陥つてゐる者は、夫々救済の道を講じて遣る  
 と言ふ状態で、眞箇以前、より以上善良の間に復活したから、  
 どうか歡んで遣つて貰もたいのぢや、彼男からも、君なり風早  
 君に、呉々も宜しくと傳言したよ。』

『へえ、……彼の間が……あれほど金錢の奴隸に沈むでゐた、彼  
 の間が……それは實に感服の外はないね……既に高利貸根性が  
 裔旨に入つてゐたから、逆も改悛は能ないと思つてゐたのにね

……それは左に右歎ばしい事だ、間のためのみならず、社會の  
 ためにも祝福せざるを得ない。あれほどの目に遇はして遣つた  
 のに、怨みも抱かず、能く傳言して寄來したね。』

『あの當時は口惜しくて堪らなかつたけれども、改心した今日か  
 ら追想する時は、少しも無理はないと言つて、笑つて當時を語  
 つてゐたよ。』

『今日考へて見れば、實に大人氣ない事をしたものさ、は、は、は  
 して今後は何をするのだね。』

『暫時は、精神の修養をしようと云つて居つたが、其中何か始める  
 ぢやらうと思ふのぢや。』

『改心した上は、何うか社會に出して遣りたいものだね、高等中  
 學時代には、俊才の一人だつたからね。』



『あれで血も涙も他一倍多い方だし、精神も確乎してゐるから、あのまゝ朽る事もあるまいと思ふのじや。』  
 『が、何うして高利貸と言ふ奇抜な事を始めたのだらうね、不思議千萬じやないか。』

『それには同情すべき理由があるのじや、一言にして盡せば、財物のために、愛を奪はれたから、失戀の結果、財物を集めて復讐でもする考へじやつたに違ひない。』

『失戀と言へば、間は美しい許嫁か何かの女があつたが、彼の女を何うかされたのかね。』

『まあ、然う言ふ譯じや、彼の女が某財産家から望まれて、間を振棄て、結婚して了つたものじやから、それがために憤慨して、財物で復讐すべく自棄を起したのじや。』

『なるほどね、意氣地のないやうな話じやけれど、同情すべき點もあるね。』

『情に脆い方だし、それに青春時代の事ぢやから、無理はないのさ……が、彼の女も虚榮心に唆かされて、間を棄て、結婚はしたものの、元々愛情から成立した結婚ではないので、財物を目的に結婚したのぢやから、半歳と経たない中に、財婚の無意味を覺ると共に、間の事が戀しくなつて、五六年の間煩悶と悔悟に、快々として沈むであつたのぢやが、其間には幾十度の悔悟の謝状を間に送つたか知れないけれども、間が頑として書面を手にだに觸れない状態ぢやから、到頭煩悶の極、劇烈なヒステリーに罹つて、遂には精神に異状を來して、精神病院に入院したのぢや、ために女の親から私に向つて、只一人の娘があつたのぢや、』

まゝ入院させて置けば、到底恢復する見込のないばかりか、二度まで自殺を企てる状態だから、救けると思ふて、間に一度會はして遣つて下れないかと、涙ながら頼むで来たけれども、他の妻たる者に、故なく面會する事は能ないものぢやから、斷つて了つたのぢや。」

言ひつゝ、尙も。

『すると再び遣つて来て、愈よ離縁して了つたから、情けに面會さして下れと、手を合せて頼むものぢやから、止を得ず間を説いて、悔悟した上は、生れ變つた人間だから、これまでの罪を宥して遣つて、會つて遣るが宜いと勧めたところが、なかなか容易に諾と言はなかつたけれども、懇々説得した結果、到頭承諾させて、今では間の手元へ引き取つて、看護さしてあるのぢや。』

や。』

『まるで小説にでもありさうな話だね。諺にも元木に優る裏木なしと言ふが、矢張愛情本位の結婚でなくては、満足な結果は得られないと見えるね。しかし間も女も共に本望が連したのだから、満足は満足だらうね。』

『餘り満足でもないぢやらうよ、殆んど半生を悪魔同様に送つて加之に精神病者を引受けたのぢやからな。けれども餓鬼道に陥てゐた間が、清淨界に復活したのは、左に右衛友のために賀すべき事ぢや。』

『では君の健康を祝福すると共に、間の復活を祝して、一盞献ずる事にしやう、船中の疲勞を慰めるには、須らく酒ならざるべからずだ……もう用意が調のつてる理だから、御一緒に彼室

へ来て下れ給へ。盡さない話は飲みながら、聞きもし話もする事にしやう。』  
椅子を離れた。

『では、無遠慮に頂戴しやう、他浦君御一緒に來給へ。』  
やがて一同食堂へ入つて、歡聲湧くが如く杯を擧げるのであつた。

(七)

荒尾は、他浦夫婦の事情を、具さに蒲田へ物語つて、吳々も指顧の任を頼むだ後、其の夜十二時一同と袂を別つて、香港を出發した。

片割月ではあるが、拭ふた如き紺碧の空には、一點の雲だにも

なく、茫々たる洋上を隈なく照して、金波銀波の跳り狂ふ態、絶景言はん方なし。

荒尾は、他浦夫妻を蒲田へ托して、介意の責任を果し終つたので、月と共に心に懸る雲もなき風情で、醜餘の軀を甲板へ突立て、深夜の風光を四顧するのであつた。

『一枝濃艶露香を凝す、雲雨巫山狂に斷腸……借問す漢宮……誰か以たるを得ん、憐むべし飛燕新粧に倚る……』

徐ろに吟じ了つて、やがて船房へ踵を回さんとした時、衣摺の音靜かに、異香の浮動するを覺えた。と見れば花にも似たる千香子が、寢覺の無聊に、他郷の月を偲ばんとして、鬢の亂毛を搔上

げながら、上つて来たのであつた。

『栗羽さんちやありませんか。』

辞をかけた。

『おや、荒尾さんでゐらつしやいましたか、他浦さん御夫婦がゐらつしやらなくなりまして、嘸かしお淋しくて居らつしやいませうね。』

『話相手がなくなつたものですから、月に浮かれて寢もやらず遊んで居ります。』

『真箇良い夜でございますことね、私ももうく無聊で堪へられないものですから、早く寢床に就きましたところが、夜半に目が覺めまして、再び眠らうと存じましたけれど、寢外びれまして、夢が結ばれないものですから、月でも眺めやうと存じまし

て、ツイ浮々と出て参りましてございますよ。』

『長途の航海では、真箇月は無上の慰藉者ですよ、何しろ巨船だと言つて見たところが、これだけの甲板が、遊樂の範圍ですかな、陸上のやうに、絶勝の風光を恣まに探る事は能ないし、嗜好の遊樂をする譯には行きませす、月でも眺めて、無聊を慰するより致し方がありませんからな。』

回しかけた睡を再び留めた。

『それでも殿方は、玉突だの圍碁だの、或ひはトランプなぞと、種々のお遊びをなさいますけれども、婦人の娛樂機關は、設備がないものですから、唯々書見いたします外は、真箇月でも眺めて、徒然を消しまするより、いたし方はないのでございますよ。』

『御有理です、私もこれほど長途の航海は始めていありますが、同行者のない、獨り洋行と言ふものは、真箇無聊を感じますぢや、男子ですら耐へないですから、御婦人は尙更でありますお察し致します。』

『私、先日からお願ひ致さう、致さうと存じながら、餘り勝手な願ひだものですから、差控へてゐましてございしますが、甚だ失禮なお願ひでございすけれど、マルセイユへ着きますまで、佛語の御教授を願ひたいのでございしますが、如何でございませう、煩くしてお可厭であらつしやいませうね。』

『徒然で困つて居りますから、可厭でも何でもありませんが、お教へすると言ふほどの事は能ないぢやらうと思ひますぢや、これまで餘程御研究なされたのでせう……』

『いゝえ、ほんの初歩だけ、それも兄に教へて貰ひましたので、發音などは滅茶苦茶なんでございすよ。』

『それは私のも同然で、正しいと言ふ事は、お受合は能かぬですが、それを御得心ならば、知つとるだけはお教へしませう……』

『有難う存じます、それでは明日から、御都合のお宜しい時刻に呉々もお願ひ申し上げます。』

『では、私の方から勝手に往く事にした方が、都合が好いと思ひますが、お差支へはありますか。』

『何う致しまして、差支へ所ではございせん、然う願はれますれば、此上もない好都合を得ますけれど、御教授をお願ひするさへあるに、それでは餘りに失禮でございすから……』

言はんとするを遮つて、

『御斟酌には及ばないです、私の船房は御承知の如く、他に相客が居りますから、勉強なぞには至つて不都合でありますぢや、だからお差支へがなければ、貴女の船室は只お一人限ぢやから閑静で宜いちやありませんか。』

『では、甚だ恐縮致しますけれど、どうか然う言ふ御都合に願ひ申し上げます。』

『承知致しました。私の方から往きますが、夜中は他の思惑も如何と思ひますから、午前か午後かに必ず上る事にします、それで御承知を願つて置きます。』

『その邊のところは、お心任せに願ひ申し上げます。』  
話半へ、靴音高く、器々と話聲を交へて上へ、三四人の支那人

が上つて来たので、兩人は欄に近く、遠方近方の夜景を眺め盡して、やがて、甲板を去つた。

四人の支那人は、二人の後影を見送つて居つたが、其中の一人が、

『彼の女知る事あるか。』

問ねた。すると甲が、

『あれ日本別嬪、能く知る事ある。汝知る事あるか。』

『私、能く知る事ある。彼の女一等室一人居る事ある。』  
すると乙が、

『一人居るそれ大層洒落てる事ある。四人密と忍び込む、樂しむ事賛成するないか。』

『それ宜しい、大きに賛成する事ある。今から直ぐ實行する宜し

い。』

丙が賛成して實行を促した。

『それ宜しくない、今夜まだなか／＼眠る事ない、明晩寢静つた時、密と忍ぶ宜しい。他に知れる大變ある。』

丁が延期説を唱へた。』

『それ宜しい、明晩實行する極る事ある。』

甲が同意したので、遂に丁の説に決定して了つた。

月はます／＼冴えて、夜は愈よ深く、波のみ高く鼓みを打つてゐる。

(八)

翌日は午前中に降雨となつて、風さへ少しく加つたために、さ

らぬだに動搖激しき洋上の、太くも荒れて、六千噸の巨船も、常になく動搖するのであつた。ために乗客の多くは船暈を催うして頭の擧らぬほどの客も出來た。荒尾は長途の航海は始めてゐるに拘らず、平氣であるに引替えて、曾て米國より歸國した經驗ある千香子は、太く船暈して、枕に就いた限り、食事は無論、牛乳一滴も喉へ通らぬまで弱り果て、了つた。

かくとは知らぬ荒尾は、約束の佛語を教ふべく、千香子を訪れたところが、服藥しつゝあるほどの病者となつて居るので、暫時病床に看護して、懇ろに慰めて己が室へ歸つた。

かくて午後にも一度慰問したが、其時は午前よりは、何程か元氣が恢復して居つたので、寸時辭を交へて立去つた。ために千香子は荒尾の情義の厚いのに感激した。

が、幸ひにも黄昏頃から、風が吹き和ぐと共に、雨もいつしか歌むで、空には點々たる星さへ見ゆる天氣となつた。船中の人は始めて愁眉を開いて蘇生の思ひをした。けれども未だ枕を上げるまで元氣を恢復した人は、誰一人としてなかつた。ために例は各室共に、嚙々たる歡聲笑語が湧くに引替えて、此夜ばかりは、寂寞たるもので、娯樂場の如き、平素満員の盛況であるに拘らず今夜のみは、客の影だに認め得られないのである。

夜は寂々として更を追ひ、早くも三更となつた。各室とも森々として眠つて居る、唯船に強い客の、酒醺に乗じて、甲板へ上るのが、時偶聞えるのであつた。

千香子は、やゝ元氣は恢復したものの、食事が進まないために疲勞を覺えたので、正体もなく熟睡した。

すると四人の辨髮奴が、室の入口に忍び寄ると見る間に、扉を開いて、千香子の室へ姿を消して了つた。けれども千香子は更に知らざるものゝ如く、すやくと睡むのである。四人の痴漢は、拔足差足寢床間近く進み寄ると見る間に、素早くも千香子の四肢を押へ、口を箝して、自由を制して了つた。駭いて目は覺したものの、其時は既に痴漢のなすがまゝに、委するの止を得ざる暴壓を受けてゐた。

一人の痴漢は、微笑を湛へつゝ、早くも既に非望を遂ぐべく、毒爪を揮はんと、藻掻きに藻掻きつゝ、ある千香子の寢床に闖入せんとした。



此刹那であつた、突然扉を排けて入つて来たのは荒尾讓介であつた。彼男は今甲板より下り來つて、千香子の病狀如何にと、其室を訪づれたのである。しかるに豈斗らんや、四人の暴漢の、言語に絶した暴行を目撃したので、奮然として進み寄るが否や、辭もかけず、鐵拳を固めて、當るを幸ひ力任せに殴り飛ばした。この襦袢を見た痴漢は、抵抗する勇氣もなく、我先にと逃げ出して了つた。荒尾は逃ぐる痴漢は追迫もせず、先づ猿轡を解いた後、涙ながらに慄へつゝある千香子に向ひ、

『もう大丈夫です、御安心なさい。』

勵す如く慰めるのであつた。

『好いところへお越し下さいました、あ、有難う存じます……』

寝衣の亂れを繕ひながら禮を述べた。

『見受くるところ、支那人のやうでしたが、一体何うしたのですか。』

『私も突然の事でございますし、御存じの通り、不快で寝むでゐたものですから、彼人達が入つて參つたのも知らなければ、何がために來たのかも存じないですけれど、辭も掛けなくて、亂暴な振舞をされましたので、始めて眼が覺めました、見れば支那人らしい人が、大勢寄つて手足の自由を止めてる上に、目にも口にも布片を覆はれましたので、もう殺されて了ふ事だと覺悟してゐたところへ、貴方がお越し下さいまして、危いところをお救ひ下さいましたのでございます。』

『それは危険千萬な場合でしたな、私はかゝる御遭難があらうとは、少しも知らんかつたけれども、例の如の甲板の上に出て、寸時景色を眺めまして、室へ歸りかけたが、貴女の病氣が氣に罹つたものぢやから、些つと見舞に寄りましたのぢや、ところが彼の状態ぢやから、事情は知れなかつたけれども、手當り次第懲りしめて遣つたのですが、それは幸ひの場合へ來合せて、宜い都合でありました。』

『能く地獄で佛と言ふ諺がございますけれど、眞箇一命をお救ひ下すつたのです、貴方と言ふ事は、目覆しをされてゐましたから、少しも存じませんでしたけれど、俄かにばたくと逃げ出しました時は、地獄で佛に逢つたよりも、遙にお嬉しう存じました。』

『が、彼奴等は御存じの者ですか。』

『いゝえ、少しも存じないんですよ、唯目が覺めました時、ちらと見たいけの事でござりますが、其時支那人と言ふ事だけは認めましてございますけれど、一面識のない人ばかりなんでございます。』

荒尾は思ひ浮べたやう、

『私は、昨晚甲板の上に出て來た、彼の支那人ではないかと思ひますが、貴女は何と思はれます。』

『なるほど然う仰やれば、或ひは然うかも知れませんがございませぬ、しかし何をやる人達でございませうね。』

『扮装もさまで卑しくはないですから、矢張乗客かも知れないですが、實に亂暴極まる奴等ぢやないですか、お軀に御負傷はな

かつたですか。』

『いゝえ、お蔭様で何處も負傷は致しませんでございました。』  
『それは何より幸ひでした。が、此まゝ捨置く時には、再び亂暴をしないとも限らないですから、船長へ訴へて犯人を搜索させませうか。』

『さあ、如何致したものでございませうね。』  
躊躇する様子が見えた。

『御名譽に障ると思はれるなら、此まゝに捨て、置くまでの事ぢやが、あゝ言ふ破廉耻は、打棄て、置くこと、再び暴行しないとは言へませんから、しかしこれは貴方の御意見に任せた方が宜いでせう、幾分か名譽に關する事ですから。』  
『慙う致しては如何のものでございませうか、船長まで内々訴へ

まして、暴行者の處分だけは宥して遣つて頂きましては……』

『それも宜いでせう。』

『その代りには、これから以後は、扉に錠を下しまして、警戒を怠らないやうに致しますでございませう。』

『成るだけ注意なされた方が宜いでせう、世の中には、兎角陋劣な奴共が多いですから。』

『慙う言ふ災難には始めて遭ひましてございませうけれど、もうこれに懲りまして、一人旅行は、決して致すまいと存じます。』

『能ひ得べくんば、お連のある方が無事でせうな。しかし御病氣は如何です、少しは恢復しましたか。』

『はい、よほど快くなりましたでございませう。』  
『折角御大切になさい。』

## (九)

其後荒尾は、千香子の病氣恢復と共に、日々佛語を教授して、無聊の幾分を消してゐた。

而うして新嘉坡に寄港した時、風早庫之助に面會すべく上陸して、日本周航會社の支店を訪づれたが、生憎風早は旅行中で面會を得なかつた。

かくて再び、無聊の航海を續けた後、三週日餘を経て、無事に佛國マルセイユに到着した。千香子は故々巴里から出迎へに来てゐた。母の良子と同行して巴里へ歸る事になつたが、船中で荒尾に佛語の教授を受けた事、危難を救けられた事など、詳しく母に告げると共に、荒尾へ禮を述べさせた後、再會を約して一先づ袖

を別つた。

荒尾は、上陸するが否や汽車に乗じて、佛都巴里へ出發したが有弊に歐洲の物質的進歩を實見して、心密かに故國の非文明を慨嘆するのであつた。

列車は翌日巴里へ到着した。先づ大使館を訪ふて、來意を告げて、旅宿其他の事を相談した後、左も右もと留學生の寄宿して居る、唯ある下宿屋の一室を借りて宿泊する事となつた。

抑も荒尾が這回の歐洲行は、漫遊と言ふは名目のみで、實は専門學の研究に來たのである。それゆゑ一週日の後には、手續を履行して、佛國、國立大學の法科へ入學した。

入學後の彼男は、嗜好の酒も殆んど禁じて、専心研學を事として、同じ下宿にゐながらも、彼より訪問する事は稀で、來り訪ふ

者があれば、快く迎へて歡談笑語するが常であつた。

すると某日突然栗羽大使から、電話をもつて來邸を促がされたので、約束の時刻に訪問した。案内を請うが否や、直ちに莊麗を極めた應接室へ導かれたが、程なく又客室へ請せられた。

其室には既に栗羽大使が待受けてゐて、相對した椅子へ迎へられた。

栗羽大使は氣品に富むだ、人格の高潔さうな老紳士で、金縁の鼻眼鏡、さてはフロックの着扱しやう、何う眺めて見ても、多年歐米の交際界に、往來した、外交家らしい風采を備へてゐる。

『私が荒尾讓介であります。今回古びた頭腦の洗濯に出かけて來ましたから、萬事御厄介をお願ひします。』  
先づ荒尾が挨拶した。

『私が栗羽です。實は早く一度お目に懸りたいと思ふて居つたのですが、公務が忙しいために機を得なかつたです。承はれば先般は、娘が船中で種々御厄介に預つたさうで、誠に相済みませんかつた。改めてお禮を言ひます。』

『何に、お世話をしたと言ふほどの事ぢやなかつたです。船暈のために病床に就いてゐられたのを、支那人共が蠻行をしかけてな、それをお救ひしたまでの事ですから、お禮なぞ言はれては、却つて迷惑します。』

『定期の航海船だから、豈夫にさう言ふ愛ひはないと信じたので單獨旅行を許したのですが、不安千萬ですね。』

『文明國の人は、豈夫あ言ふ蠻行はしないぢやらうと思ひますが何しろ支那人ですから、はゝは。』

『列國から侮辱されるも無理はないですね……時に君は、これまで何の方面に活動してゐられたのです、見受けるところ、大學を出られてからは、餘程間があるやうに思はれますがね、實業界にでもゐられたのですか。』

『いえ、ツイ先月まで、久しい間、これと言ふ仕事もせず、浪人して居りました。』

『それでは、官途に奉職された事はないですか。』

『官途に奉職したと言ふも面目ない位なのですが、愛知、静岡の兩縣で、參事官を奉職しましたが、一身上の都合から辭職しまして、その後が今日まで、浪人して居つたです。』

『それは惜むべき事でしたね、今日まで官海にゐられたら、少くとも勅任の位地は得られてゐるのに……して今後の目的は如何です……』

『まだこれと言ふ方針は定めて居りませんが、何事も二三年當地に居つて、荒むだ頭腦を養つてからの事です。』

『なる程有理な事です、折角御研學が肝要です。ところが、一つ君に願ひがあるので、これは私の願ひなり、娘の希望なのです、研學の餘暇をもつて、娘に佛語を教へて遣つて貰ひたいと思ひますが、御都合は如何でせうね。』

『都合は如何でも就きますが、航海中こそ強てのお頼みでもあつたし、私も無聊ちやつたものですから、お相手をしましたけれども、もう此地へ到着された上は、私のやうな發音の怪しい者にお附けなさるよりは、佛人に附いて御研學なさつた方が、將來のために宜いかと考へます。』

『それは、私もさう思はないではなかつたですが、まだ本の初歩です。外國人に附けても、却つて双方が困る事と思ひまして、いくらか解るまでお願ひして、それから外人を頼まうと思つて居りますから、御都合が附いたら、ごうにか解るやうになるまで、御厄介が願ひたいですが、如何でせうね。』

『然う言ふお考へなら、お引受けして、及ぶだけお相手する事に致しませう、が、大學の方の都合では、毎日と言ふ譯には行きかぬるかも知れんですが、それは豫めお断りして置きます。』

『それは御懸念なく、御都合次第で宜いです。』

言ひ了るが否や、呼鈴を鳴らした。豫て打合せでもしてあつたのであらう、やがて合娘千香子が、日本服のまゝ、盛粧を凝して入つて来た。

荒尾を見るより、如何にも懐慕しさうに、

『能くお越し下さいましたことね、もう先日から父に願ひまして一度お越しが願ひたいと存じてゐたのですけれど、大層公務が繁忙で、餘暇がないと申すものですから、存じながら、失禮してゐましたのですよ、どうか悪しからずお免し下さいまし、航海中は一方ならない御厄介に預りまして、お禮の申上げやうもございません、お蔭をもつて、無事に着きまして、甚麼に歡んでゐるか知れないんでございますよ。』

荒尾は椅子を離れて、

『航海中は何彼と失禮しました。御無事にお着なさつて結構です。今日は斗らずお邪魔致します。』

禮を返した。

『さあ、どうぞお掛け下さいまし、私も失禮いたします。』  
と荒尾を席に就かせ、己も椅子に寄りつゝ、

『然う／＼申し遅れましてございますが、承まはれば国立大學へ御入學遊ばしたさうでございますが、何よりお目出たう存じます。』

『入るは入りましたが、前途遠慮で、はゝは』

歡ぶ色もなく、寧ろ自ら嘲る如く笑ふた。

栗羽子爵は、微笑しつゝ、

『唯今お前の希望をお願いしたら、早速御承諾下さつたから、それで呼んだのだ、お禮を申して、お前からも能くお願いするが宜い。』

『左様でございますか、有難う存じます、』  
と荒尾に向つて、

『とんだ御厄介をお願い申しまして、定めて御迷惑でらつしやいませうけれど、何分にも宜しくお願い申し上げます。』

『本場へお入來になつたんですから、外人へお附なさるやうにと御辭退したのですが、暫時の間と言ふ事ですから、お引受け致しました。』

『直に外人に附きましても、餘り解らな過て困るものですから、御迷惑をお願いして貰ひましたのです。永くがお嫌でございまして、せめて少しく解るやうになりますまで、宜しくお願い申します、就きましてはお宿へ伺ひまして宜しうございませうか、如何でございませう。』



「唯今閣下へ申上げて置いたのですが、大學の都合では毎日お教へする事がならない場合もあらうと思ひますで、私が上る事に極めて置きませう。」

「然う願はれますれば、何より好都合を得ますから、それでは甚だ勝手にございますけれど、どうかさう言ふ事にお願ひ申します。」

「承知致しました。」

すると子爵は千香子に向ひ、

「どうだ、もう支度は調ふたか。」

問ねた。

「はい、何時でも宜しうございます。」

言ふ時花の如き電燈が、一時に點火した。

子爵は更に荒尾に向ひ、

「變つた御馳走はないけれども、晚餐が上げたいから、彼方へお入來下さらないか。」

「それはお氣の毒ですな。折角の御厚意ですから、頂戴致しませう。」

導かるゝまゝ、設けの食堂へ入つた。而うして、美酒佳肴の饗應に、且つ飲み、且つ語り、陶然として辭し返つた。

(十)

荒尾は翌日から、栗羽大使の官邸へ、凡そ二時間位ゐづゝ家庭教授に通ひ出した。そうして、三ヶ月ばかり経過する中に、早くも友人は勿論、栗羽子爵家の人々に至るまで、例の荒尾式特徴を

發揮して、稜々たる氣骨と、懷慕しむべき情義とは、等しく他の尊敬する所となつた。

就中栗羽子爵の如きは、早くも其器の非凡なる點を看破して、大いに佩服するのであつた。

果せる哉、彼が緻密にして明晰なる頭腦は、早くも大學教授間の賞讃惜かざる所となつた。

某日荒尾は例の如く、栗羽家から歸つて來ると、下宿屋の主婦から、二通の郵便を受取つた。

見れば一通の差出人は赤檜滿枝と記して、一通は明澤貫と記してある。其まゝポケットへ入れて、己が室へ上つた。而うして椅子へ倚るが否や、ポケットから取出して、封を開いて讀むのであつた。

御無事にお着遊ばされ、殊に國立大學へ御入學遊ばされ候よし、他事とも覺えず嬉しく存じたり。私し事も漸く間様の御決心に倣ひ、豫々御忠告下され候御厚志に基き、斷然悔悟の人と相成り候間、能くぞ發心せしものと、お賞め下された候。

これと申すも、過日貴方様より、私の身の上に就き、間様へお差出し相成り候御書面に、執念き心をほとく動かされ、遂に決心致したる結果に候へば、申さば貴方様は、發心得度の導師に在し申し候。

就きましては、煽て遊ばす言の葉と知りつゝも、御書面のお勧め任せ、次便の出船高雄丸に乗込み、斷然御地へ向け出發いたし候へば、到着の上は萬事お心添へ下されたく、くれ

くも願ひ上げり。

私の決心、目的などに就きましては、親しくお目に懸り候上にて、語りもし、お指教をも受けべくと存じ候まゝ、茲には略し候へども、大略は間様より御通信下さる筈に候へば、それにて御承知下されたく候。

間様の仰せらるゝには、佛蘭西三界まで、荒尾を迷はしに出かけるは、怪しからないとお調戯に候へども、私は優しき言の葉を力草に、迷ひに出かけるのだとお答へ申上げ候へども、しかし身に餘る悪銭だけは所持致し居り候へば、其方の御迷惑だけは相掛け申すまじく候間、御安心の上、幾重にもお力添のほど、願ひ上げり。

乍末筆、間様には、未だ熱海にお宮様と共にゐらせられ、専

ら御療養中に候得共、貴方様御出發當時と比較致し候へば、よほど御快方に向はれ候故、間様にも張合ある事と、蔭ながら喜び居申し候。

先は御通知旁々お願ひまで申上げり。

満枝の書面にはかく記してあつた。讀了つた荒尾は、微笑を浮かべて、

『して見ると、漸く目を覺して悔悟したものと見えるが、あゝ言ふ悪魔が、一人でも眞人間になるのは、人道のため社會のため慶すべき事ぢや。

しかし、悔悟すると同時に、歐洲の文明地に来て、活動しやうと言ふは、破天荒の奮發ぢや、有難に彼の女ならでは能ない決心ぢや何うか、成功させたいものぢや。』

「この書面で見ると、宮さんが病氣も、餘程快くなつたと見えるな。」

言ひつゝ、更に貫一からの書面を披いて読み始めた。

益々御研學の段大賀此事に御座候。扱第六の御通信着、拜讀の結果、早速赤橙滿枝嬢（敬意を表して嬢と言ふ）を招き、貴書を示して御厚意を傳へ候處、即座に悔悟され、其日より財産の整理に取懸り、僅か兩三日にて見事なる結了を告げられ候のみならず、大いに歐洲に渡航して、新なる生涯を造り出さんと覺悟致され、近々横濱出帆の高雄丸にて、御地へ渡行致され候事に決定致し候。有緊に滿枝嬢なるかと、其決斷發奮には、唯々敬服の外こなれく、今更悔悟に吝なりし小生

の心事、汗春の外御座なく候。と同時に貴兄の嬢を見るの明に敬服仕り候。

これしかしながら、前後兩回に渉る、貴兄の切なる勸告の結果にして、嬢が貴兄を信頼するの厚き事は、一方ならぬものにて、這回の渡行も、貴兄の其地に在るがための奮發に候得ば、到着後は十二分なる監督、偏へに懇望の至りに不堪候。二白、御煩慮に預り候、宮子病氣は、日を逐ふに従ひ、精神沈靜致し、時々の發作も殆んど跡を断ち、談話もや、秩序立ち申し候に付、此分にて静養を加へ候へば、恢復の日も遠かるまじくと樂み居り申し候、幸ひに御安慮下されたく候。三白。富山唯繼は、預金取附に遭ひ候結果、本支店の銀行、一時に支拂停止をなし、所有財産の全部を提供して、整理中

に候へども、到底整理の見込立たざる由に候。自業自得の結  
 果とは言へ、惘然なる運命と、今昔の感に堪へず候。栗羽令  
 嬢へ御面會の節も候は、好き語り草かと存じ候呵々。  
 乍末筆、鳴澤老夫婦、并に鰥淵、狭山の兩氏よりも宜敷傳言  
 これあり候間、茲にお傳へ申上候。  
 時下漸く暖氣相加はり候得ば、御自愛專一に祈上候。  
 かく記してあつた。荒尾は書面を手にしたまへ、感慨に耽るの  
 であつた。

(十一)

書面が着いてから、約二週間の後、赤櫻滿枝は正に巴里へ着い  
 た。荒尾は豫め宿を定めて置いて、停車場へ迎へて遣つた。而う

して直に馬車を雇ふて、宿所へ同行した。室に入つた後、滿枝は  
 淑かに、

「色々御厄介かけてお禮の申しやうもございません、豫じめの消  
 息は、書面で御承知下さいましたでございませうが、眞箇貴方  
 の御勸告に従ひまして、心の底から悔悟致しまして、断然人並  
 の軀に活復致しましてでございます。と言ひますのも、實は赤櫻  
 が歿しました時、吁々人間と言ふものは、情けないものだ、あ  
 れほど人に憎まれ、怨まれ、嫌がられて、犬畜生のやうに言は  
 れながら、不義の富を作つても、死ぬ際には、半錢だつて持つ  
 て往かれはしないと、熟々悟りますと共に、蓄財の無意味が、  
 痛切に感じられました。で、いつまでも繼續すべき家業でない  
 と感じてゐた矢先へ、私が生命までもと打込むでめた、間さん

が、貴方の御忠告で、到頭悔悟してお了ひなすつたでせう、だ  
ものですから、つく／＼心の底に言ひ知れぬ、淋し味を感じて  
ゐますところへ、懇々と貴方のお勧めを受けたものですから、  
悔悟の根ざしが決心となりまして、到頭復活したのでございま  
す。

と言ひつゝ、

『それに悔悟は致しましたもの、世間の方は、彌張以前の悪魔  
だと、爪弾してゐらつしやるであらうと思ひますと、何だか快  
い氣地は致しませんので、どうか寸時東京を去つて、世間から  
忘れたいと思つてゐる折柄貴方の御書面を拜見したものです  
から、これこそ幸ひと、間さんへも相談いたしましたして、斷然此  
地へ參る決心致したのでございませうけれど、御存じの通り無教

育者でございませうので、掬て、加へて外國語と申すものは、少  
しも存じない明盲でございませうから、不自由とは存じましたけ  
れど、貴方がゐらつしやるのを力に、何うにかなるであらうと  
無茶苦茶に出かけて了ひましたのですよ、定めてお可厭であら  
つしやいませう、けれど妹が來たのだと思召して、幾重にも宜  
しくお願ひ申し上げます。』  
と挨拶した。

荒尾は例の調子で、

『貴女のやうな才氣に富むた婦人を、一生畜生道へ陥して置くの  
は、氣の毒なものぢやと思ふたから、それで日本にゐる頃も、  
屢々諫めたけれども、其頃は私は貴女に債務があつたものぢや  
から、貧乏書生が何を言ふか位で、私の言ふ事には、耳を傾

けられんぢつやた。けれどもお連合も亡くなられたさうぢやし  
貴女が慕つてゐられた、間も悔悛して足を洗ふて了つたし、貴  
女の心にも、いくらか寂寞を感じて居られるに相違ないから、  
今一應濟度の能るもんならして見たいと、あゝ言ふ書面を問へ  
向けて出したのですぢや、ところが早速決心なさつて、断然廢業  
されたのみならずぢや、遠く此地まで來られると言ふ通知があ  
つたものぢやから、勸告のしがひがあつたと、非常に満足しま  
したぢや、

就いてはです、私は貴女を勸めて外國まで出發させた責任が在  
るのぢやから、力の及ぶ限りは、何事にまれ盡力しますから、  
茲に新なる生涯を作り出す意で、成功者となつて歸朝して下さ  
い。言語が通じないために當分は不自由でせうが、半歳も立つ

中には、日用語だけ位は覺えられますよ。』

『私も日用語ばかりでなく、此方へ滞在して居ります中に、佛  
語を勉強しまして、普通の事だけは分るやうになりたいと存じ  
て居りますのですから、早速何方かへ御紹介が願ひたう存じま  
す。』

『宜いお心掛けです、さう言ふ御決心なら、直に適當な教師を探  
して上げますが、それは宜いとして、貴方の目的は何うですな  
何か事業でも始めなされる精神かな。』

『三十萬や四十萬の端た金子で、佛國第一の大都會へ來て、事業  
を始めると申ししても、男子ならば、そこにもございますけ  
れど、女の身では思ひも依らない事だと存じますから、然う言  
ふ事は断然廢しまして、佛國は、大層美術が發達した國だと承

はつて居りますから、美術を研究したらばと存じますが、如何なものでございませうね。』  
相談した。

『なるほどお説の通り、佛國は美術國で、美術學校もあれば、有名な美術家も澤山ありますが、何う言ふ美術がお希望なんですか。』

『女の身に相應しい、繪でも學んだらばと、存じますけれど、今からでは修業が能ないでございませうかね。』

『御決心一つで、修業も能れば、大美術家になれる事もありませんが、元來繪はお好ですか。』

『柄にないとお笑ひ遊ばすか存じませんけれど、實父が大層好みましたので、それに感れたと申すのですか、大層好きでござい

まして、高利を食りながらも、好きな幅物などには、随分馬鹿な金子を取られた事もあるのでございますよ。』

『好こそ物の上手と言ひますから、お好なれば至極結構でせう、繪畫なら女に適當な職業ですからな。』

『若し繪の方が不適當だと思召すなれば、もう一つは音楽家になるか、藝術家になるか、この三つの中で、私に適當だと思つて下さる職業を、お撰みが願ひたいのです。』

荒尾は熟と考へて居つたが、

勉強すると言ふ決心があるならば、矢張美術を研究されるが適當なり安全でせう、貴女のやうな美人は、音楽家や、藝術家になつては、誘惑のために成功しないかも知れない。』  
如何にも眞面目に言ふ、



「荒尾さん、もう其御懸念だけは御安心下さいまし、謂はゞ失戀者ですもの、戀だの色だのと言ふものは、懲々しましてごさいますから、甚麼誘惑に遭ひませうとも、それに決心を亂すやうな事は、斷じて致さない覺悟でございます。」

「敬服しました、其御決心がある上は、何事も誓つて成功します。それでは美術家になる決心で、研究をお始めなさい。」

「はい、どうか其お意で御盡力を願ひまするでございます。」

「早速佛語の方も、繪の方も、兩方とも探してお知らせする事にしませう。それで賄ひ其他の事は、私が極めて頼むで置きましたから、不味で食べられないやうなら、重ねて談判します。宜い事には、此家へはこれまで永く日本の學生が居つたので、いくらか日本語が通じるから、言つて見て解らない事は、手真似

で話すが宜いです。注意までに、必要な日用語だけ、茲に假名で書いてありますから、これを見て話をすればどうにか通するぢらうと思ひす。」

言ひつゝ、洋紙に書た、日用語を與へた、

「何から何まで有難う存じます、これを頂けば、これだけでも一生懸命に記憶致しますわ………全で啞の旅行同然なのですからね。」

「何に記憶しやうと思へば、直に覚えられますよ。覚えなきや忽ち困るのぢやから。」

「夜を日に繼ぎまして、どうか普通の會話だけ話せるやうに、なりたひものでございます。」

「まあ、生れ變つた意で勉強なさい。」

滿枝は日ならず、荒尾の盡力に依つて、佛國知名の畫家ローラ  
ンス氏の門下となつて、日夜彩管に親しむ傍ら、某婦人教師に附  
いて語學を研究する身となつた。

荒尾は滿枝の熱心を愛で、絶えず奮勵を促すのであつた。  
かゝる間に、夏去り秋を迎へ、早くも初冬となつた。

滿枝が勉強と、熱心の効は空しからず、僅か半歳ばかりの間に  
普通の會話には差支へぬまで、語學が進歩すると共に、繪も著  
るしく上達して、近頃では三脚を手にして、寫生に出掛けるま  
でになつた。

扱又荒尾は如何にと言ふに、日を経る毎に聲價を揚げて、日本

留學生中、稀に見るの俊秀と評さるゝに至つたが、彼男は歡ぶ色  
もなく、半歳一日の如く、大學から歸るが否や、栗羽家へ通ふて  
千香子への教授を怠らなかつた。

某日例の如く、栗羽家を訪れて、千香子の教授を了つて歸らう  
とすると、子爵から用談があるとの事で引留められた。

④ 應接室へ入つて暫らく待つて居ると、大使の室へと通された。  
彼男はこの官邸に、殆んど八ヶ月間、毎日の如く通ふて居るが、  
未だ曾つて、大使の書齋へ通された事はなかつた。如何なる用談  
であらうかとは思ふたが、さりとして心配する様子もなく、靜かに  
一禮して席に着いた。

子爵もいと打解けた態度で、  
『日々御足勞を煩はして相濟まないですね。お蔭で大層進歩した

やうです。』

禮を述べた。

『著るしい御上達です、もう私のやうな發音の不完全な者にお習ひになるのは、却つて將來に弊害が生ずると考へますから、此方の教師にお附きなされる方が宜いと思ひます。お嬢さんにも再度お侷めしときました、今日は特に貴方へお侷め致しておきます。』

『君の發音で不足はないけれど、いつまでも御足勢かけては、君も御迷惑であらうから、それではお侷めに任せて、然う言ふ事にさせませう……それは然う極めるとして、今日君を引留めたのは、折入つて相談したい事があつたからです。』

一段聲を低めて、

『立入つた事を問ねるやうだが、君はまだ獨身でゐられるか、それとも日本に妻君があるのですか。』

問ひ試みた。

意外の問を受けた荒尾は、覺えず眼を睜つて、

『いや、まだ妻は持つた事ありません、貧乏の爲續けで、妻を貰つても食べさす事が能なかつたです。』

子爵は微笑を洩らしつゝ、

『それでは一つ頼みがあるのだが、不肖女で氣には適はないであらうけれど、千香子を妻に貰つて欲しいのだが、如何でせうな全体態う言ふ話と言ふものは、夫々法式のあるもので、相當媒酌者をもつて、申入れべきが當然であるけれど、愈よ成立した上は、改めて媒酌者も撰定するけれど、これは本の内談で、君

の意見を聞いて見るまでの事ですから、どうか其意に願ひたいです。』

荒尾は躊躇する様子もなく、

『折角のお辭ですけれど、それは拒絶する外ないです、何故なればです、唯今も言ふ通り、貰つても養ふ事が出来ないです、どうか悪しからず思つて下さい。』

飾氣もなく断つた。

『君のやうに淡泊に言へば、成程然うも言はれるけれど、私が恃む所が在つて、恚うして相談するからには、其邊の心配は君にさせない精神です。』

『すると、家政の補助でもして遣ると言はるゝのですか。』

『補助と言へば語弊があるが、そこは相談の上で何とかなるであ

らうちやありませんか。』

『しかし、閣下は私を買被つて居られるやうですが、私は子爵家と結縁するやうな、さう言ふ資格のある男ぢやないですよ、御存じは有りますまいが、私は佛國に來るまでと言ふものは、東京在の片田舎に、一人の書生を連れて、少に膝を容れらるゝだけの茅舎に住つて、舊友の情けに依つて、某官省の翻譯を引受けて、漸く糊口を凌いで、居つた状態で、見る影もない生活をして居りましたぢや、ところが高等中學時代に、兄弟の如く親しくして居つた友人が、學費を出して洋行させて下れたために恚うして當地へも來る事が能たんです。決して私が力で大學に入つて居るのぢやないです、ですから謂はゞ一介の窮措大で、これから荒むだ頭を搦き直して、ぼつ／＼人間の務めをしやう

と言ふ、研究中にあるのです。  
と辭をきり、

『しかるにちや、漸く大學に入つたばかりで、妻を貰つたなぞと言ふては、私の素志に違ふのみならず、第一學資を出して下れた、恩人へ對しても、何の面目がありませう、恚う言ふ事情でありますから、折角のお辭ながらお断りするのです。』  
子爵は、シガーを喫しながら、沈と聽いて居つたが、其告白を聞いて、愈よ心を動かしたやう、

『能く解りました、君の性質としては、決して無理からぬ事です。ところが、これは私一人の希望ではないので、實を言へば娘も切望してゐるのだから、君から拒絶されたと言へば、非常に失望するで有らうと思ふが……それでは恚う言ふ事には願

はれないでせうか、君が卒業されて、日本へ歸られて、地位が定まるまで、結婚は延ばすとして、婚約の内諾だけして貰ふ事は、』

荒尾は寸時く熟と考へて居つたが、

『それでは、殆んど結婚したも同然ぢやから、私の性質として、承諾する事が能ないのですぢやから、それほご思ふて下さるんなら、飽まで拒絶するのは、失禮ぢやと思ひますから、私が日本へ歸つて、相當の地位を得るまでです、若も令嬢が未婚で居られたなら、其時は御相談に依つて、結婚すると、恚う言ふ事を約束して置きますから、此餘は要求下さらないやうに願ひます。』

略子爵の要求と同様、明かに婚約こそせぬけれど、婚約に等し

い誓を立てた。

子爵は早くも意のあるところを覺つて、

「いや、其辭を聞けば本懐です。それでは其れまで娘が未婚で居れば、不肖ながら御承諾を、堅く願ひして置きます。」

「決して違約は致しません。」

「とんだ無理を言つて氣の毒でした。それでは晩餐を一緒にするから、彼方へ来て下さい。」

荒尾は遠慮もせず、共に晩餐の卓に着いたが、千香子は何となく不安の色が見えた。それは荒尾の決答如何にと危ぶんでゐるからである。

荒尾は晩餐が了ると共に、匆々辭し歸つた。

後で子爵は、夫人并びに千香子に向ひ、荒尾と縁談の模様を詳

しく物語つた後、

「實に見上げた男だ、大學の成績を聞いて見たが、先づ今日の成績から推す時は、優等第一で卒業するであらうと言ふ評判だ……日本の大學卒業後、一時地方の參事官を奉職してゐたと言ふから、今日まで勤続してゐたら、少くとも縣知事にはなつてゐるであらうに、惜い事をしたものだ。どうか歸朝後は、相當な地位を得させたいものだね……」

千香子は、希望の戀を遂したを歡ぶ如く、面羞ゆげに聞いてゐた。

子爵はやゝ改まつた調子で、  
「しかし、もう婚約したも同然だから、言ふまでもない事だが、一層身を慎まなきやならないよ、萬一不品行な事があらうもの

なら、お前一人の耻辱ではない、私の面目に關るのだから、此事だけは特に注意して置くよ。宜いか。』

『はい、一層注意いたすでございます。』

『あれだけの良人は、容易に捜されるものではないから、嫌はれないやうに、社會に出るのを待つが宜い。』

『委細心得ましてございます。』

(十三)

千香子は子爵の命に依つて、一ヶ月の後から佛人を官邸に招いて、教授を受ける事になつた。けれども、荒尾も時々官邸に招かれて、晚餐の饗應を受ける、千香子も時として荒尾を下宿に訪ふて、談話に時を移す事もあつたが、苟めにも禮を奈すやうな事は

断じてなかつた。

荒尾の下宿を訪ふ女は、千香子の外に今一人滿枝があつた。始めは誰知る者もなかつたが、いつとはなしに同宿の留學生の知るところとなつた。

『おい、牧野、君は荒尾の室へ遊びに来る、日本美人を知つて居るか。』

同じ下宿にある留學生日高壯六と言ふ男が、來訪の友に恚う問ねた。

『知つて居るよ、二十七八位の美人だらう。』

『うむ、其女もあるが、また外にあるよ。』

『へえ………其奴は知らないが、二人も來るのかい。』

『其の君が知らない方の女を見せたいのだ、素敵にハイカラな、』

「非常な美人で、さうさね、年齢もまだ二十歳若くは二十一位のだよ。」

「一体荒尾のころへ、何をしに然う言ふ女が来るのだらう、彼の氣骨稜々をもつて任じて居る荒尾が、豈夫怪しい關係を作りはしないだらうがね。」

「荒尾だつて木や石やあるまいし、關係の女がないとは言へないさ、尤も年齢上の方の素性は、略分つたのだが、若い方の女は更張知れないよ。」

「年齢上の方は何者だい。」  
「繪畫研究のために來て、フローリンスの家に下宿して居る女ださうな。」

「女美術家かい、然うかい、しかし財産家の娘だと見えて、随分

贅澤な扮装をしてるぢやないか。」

「いつもなかく美しく飾艶して來るよ、屹度相當の家の娘だらうよ。」

「そこまで身元調が済むなら、何がために來るのか知れさうなものだがね、それはまだ分らないのか。」

「どうもまだ、其處までは調べが就かないが、いづれ純潔の關係ぢやないだらうよ、荒尾のやうなのはあれで、案外女には脆いものだからね。」

かゝる談話の最中へ、岡田と言ふ美術學生が訪ねて來た。ために噂に一層花が咲いた。

「おい／＼岡田、今日高と噂をしてゐたのだが、君は此處に下宿して居る、荒尾を知つてゐるだらうね。」



『うむ知つてる、某女美術學生の宿で、二度ばかり會つた事がある。』

『その女美術生と言ふのは、時々荒尾を訪ねて来る、二十七八の美人ぢやないか。』

『然うだ、さうだ、その美人だ。』

『一体彼女は荒尾と何う言ふ關係があるんだ、君は知つてるだらう。』

『うむ、知つてるとも、能く知つてる。』

『荒尾は情夫かい。』

『なあに、情夫でも何でもないさ、彼女の女は財産家の未亡人で、三四十萬圓の財産を持つてゐるのださうだが、荒尾の友人から監督を頼むで來たので、何事でも荒尾に相談する義務があるの

で、それで時々訪ねて來るのだよ。』

『だつて、情夫でないとは限らないでないか。』

『ところが、彼の荒尾と言ふ男は、日本にゐる頃から、品性の正しい、人格を重んずる男で、同僚間でも敬意を拂はれてゐたほどで、恐ろしく情義の厚い、氣骨のある人ださうだが、女などは天で眼中に置てゐないさうだ。』

『だけれども、彼の女の外にまだ若い美しい女が時々來るんだよ。』

『それも知つてるよ。』

『へえ、へえ。』

二人は覺えず膝を進めて、

『なかく詳しいものだね、一体あの女は何者だね。』

『彼の女は栗羽大使の令嬢だよ。』

『なるほど、然う聞けば、大使の令嬢でいもなかつたら、他にあ  
言ふ日本令嬢はない理だからね、して栗羽令嬢が、何うして  
荒尾を訪ねて来るのだ。』

『其處が荒尾の品性の正しい、人格の高い證據だよ。』

『可厭に賞めるぢやないか………路路でも貰つたのぢやないか  
い。』

『莫迦を言へ、荒尾の人と成を栗羽大使が聞傳へて、令嬢が家庭  
教師に頼むのだ。そう言ふ關係があるから、時々訪ねて来る  
んだよ。』

『然うか、それで漸く疑問の鍵が解けた。仔細を聞いて見れば、  
想像したほどの興味もなかつたね。は、は、は。』

『扱は、内々妬いてゐたのだね。』

『或ひは其邊かも知れないね。は、は、は。』

『は、は、は。』

果は一同笑ひに了つたのである。

この噂が留學生間に傳はると共に、荒尾が人格は自然に敬意を  
拂はれるに至つた。

(十四)

荒尾が研學に怠らず、滿枝が寫生に熱心に、千香子が佛語を勉  
強しつゝある中に、早くも其年は暮れて翌年の二月となつた。

荒尾は例の如く大學から歸つて來ると、主婦から一通の郵便を  
受取つた、それは親友嶋澤貫一から來たのである。室に入るが否

や、遅しと封を開いて、黙誦するのであつた。

光陰寔に矢の如く、早くも兄が出發の紀念月とは相成り申し候。久しく音信を怠り居り候ところ、御動靜如何、定めて御健勝の御事と遙かに奉賀上候。降つて小生事も恙なく、先便開陳致し候事業に、漸く着手致し候間、幸ひに御安意下され度候。宮子事も、全快後色艶も漸く恢復し、健全當時よりも體量を加へ、効々しく立働居り候に付、是又御休神下され度願ひ上候。

却説、過日大館老人、何か農商務省に要用有之、突然上京致され候て、電話をもつて會見を促され、旅館へ訪問面會致候ところ、意外にも御愛嬢民子様縁談につき、縷々懇談致され、其結果小生に仲介の勞を托され候に付、餘義なく承諾致

し候間、茲に其大略を申述べ候條、篤と御熟考の上、何分の貴答煩はしたきものに御座候。

そは別義に無之、愛嬢を貴兄の妻君に媒酌せよとの依頼に有之候、此義に就いては、小生も太く躊躇仕り候。と申すは、結婚に就いては、苦き／＼經驗を味ひたる身の、貴兄の希望もあるべきに、貴兄とは深き／＼關係ある大館氏の愛嬢を勸むるは、萬一御意に適せざる場合、拒絶の辞柄に御迷惑の段を推察すればに御座候。

されど特に小生を撰定して依頼さるゝを、拒絶も成り難く、餘義なく引受け、心苦しくも茲に御高見相伺ひ候次第に付、不悪す御諒察の上、諾否小生まで御通報下され度、得貴意申し上候。

乍彌滿枝様へ宜しく御傳へ下され度願ひ上候。

かく記してあつた。

讀み了つた荒尾は、太く當惑の態で、

「窮つた事を言つて來たね……大館先生に娘さえのある事なぞ忘れて了つてゐたが、愆う言はれて見ると、確にあつたわい、先生が間へ特に頼まれるほどでは、貰つて欲しいに相違ないけれども、今日となつては致し方がない、栗羽子爵へ誓つた辭があるからな……」

言ひ了らぬのに、

「荒尾さん失禮致して宜しうございますか。」

扉の外から辭をかけて、靜かに排けたのは滿枝であつた。

荒尾は手早く書面を卷きながら、

「貴女でしたか、お入りなさい、唯今間から書面が來たものですから、讀むで居つたのです、貴女へも宜しくと言つて來ましたよ。」

「左様でございますか、有難う存じます。御夫婦共、お變りはあ

らつしやいませんでございませうね。」

「至つて無事ぢやと言つて來ました。就中お宮さんは、健全當時よりも体量が増したさうですぢや。」

「まあ、それは御結構でございますわね、間さんも定めてお歡びなすつてゐらつしやるでせうね。」

「歡んでゐるでせうよ、一時は絶望したほどの重患ぢやつたのがすつかり治つたのぢやからな。」

「真箇御本望であらつしやいますわね……時に荒尾さん、私貴

方に歎んで頂きたい事がございまして、些とお訪ね致したんで  
ございますよ。』

『何ですか。』

『いえ、大した事ではないのですけれどね、先生から、美術展覧  
會へ、何か出品して見るが宜いと勧められましたので、静軒を  
寫生して出して見ましたところが、斗はずも審査の結果展覧を  
許される事になりましたから、それを歎んで頂きたいと思ひま  
して、些つとお話しに伺つたのでございますよ。』

『それは御名譽な事でしたな、と言ふのも貴女が平素勉強された  
賜物ぢや、どうか此後とも、益々勉強して、屈せず撓まず御勉  
勵が肝要です、幸ひ間へ返書を出しますから、通知して遣りま  
せう。』

話半へ案内を請ふ呼鈴の音が響いた。

『こりや千客萬來ぢや、誰が来たか知らん。』

言ひつゝ、荒尾が立ちかけると、滿枝が推し止めて、

『私がお取次致しませう。』

言ひつゝ、扉を開けた。

『誰方様でゐらつしやいませう。』

『栗羽でございしますが、お宅でゐらつしやいませうか。』

『はい、居らつしやいますでございします。』

言ふ聲を聞いた荒尾は、滿枝の知らせも待たず、入口へ出て、

『千香子さんでしたか、さあお入りなさい。』

『では、些つと失禮致します。』

淑かに會釈して入つた。

栗羽と聞いた満枝は、談話の妨げだと思つたので、

「荒尾さん、私これで御免蒙りますわ、どうか御閑暇がらつしやいましたら、一度御観覧なすつて下さいまし、優待券を差上げて置きますから……」

一葉の優待観覧券を出した。

「是非繰合せて拜観に往きませう。」

「どうか、間さんへ御通知下さる事だけは、お見合せ下さいませうやうにお願い致します、御吹聴に預るほどの出品ではないんでございますから……」

「然うですか、それでは見合せて置きませう。」

「では、失禮致します。」

と千香子にも黙禮して歸つて往つた。

千香子は其姿を凝乎と眺めて居つたが、何となく疑惑の念が徹見えるのであつた。

荒尾は無頓着に、

「御散歩のお歸りがけですか。」

問ひ試みた。

「はい、些つと買物に出かけましたので……」

「然うですか。」

「それに父の傳言を頼まれてまして、お邪魔にお立寄りしましてございます。」

「然うでしたか、暫時お伺ひしなかつたですが、お變りはないでせうな。」

「はい、何も變つた事はないんでございます。」

『して閣下の御傳言と言ふは、何う言ふ事ですか。』

『誠に失禮ですけれど、急に御相談いたしたい事が出來いたしましたから、一寸お入來が願ひたいと、斯様申しましてございませう。』

『然うですか、今日でせうか。』

『はい、晚餐を召上らなくて、宅で召上るお意でと、恚様に申しましてございます。』

『では、夕刻からお伺ひすれば宜いのですな。』

『はい。』

『承知致しました。』

言つて千香子の顔を眺めながら、

『御勉強の方は如何です、相變らず御精が出ますかな。』

『はい相變らず教へては頂いてゐますけれど、なか／＼進歩の跡が見えないんでございますよ。』

『私の當音とは、餘程違ひませうな。』

『いゝえ、少しも違つた點はないのでございますよ、ですから、

これほどならば、引續いて貴方に御教授を願へば宜しかつたと然う父へ話しましたら、お前は宜くても、荒尾さんの方が、勉強の妨げになると、左様に申されまして、成程と思つて大笑ひいたしました。』

『太い違ひは有るまいと思ひましたが、それでも何程かは必ず違つた點があるぢやらうと、密かに心配して居りましたが、太く違つてゐなかつたら、まあ／＼結構でした。』

『眞箇歎びましてございます、教師も感心して居りましてござい

ますよ、日本人でこれほど發音の正しいのは、稀だと申しましてね。』

『同じ佛語でも、上流の辭と、下等社會の辭とは、大變な相違がありますので、其邊の事は、日本と少しも相違はないんです、私は幸ひに大學に居る頃から、上流の辭で教へられたので、それだけは都合が好かつたです。』

『其事も賞めてゐられましたら、申しましてございませうよ、大層會話が上品だと申しましてね。』

『それは幸ひでしたな、まあ、怠らず御勉強なさい。』

『有難うございます……』

と微かに答へた後、寸時無言のまゝ、我と我が膝の上に視線を

落してゐたが、やがて極り悪しうに、

『あの、先刻お歸りなすつたのは、彼は何方のお方でゐらつしやいますか。』

疑念の團を解くべく問ひ試みた。

『彼女ですか、彼女は美術を研究に來てる人です。』

事もなげに答へた。

『御存じのお方でゐらつしやいますか。大層お美しい方でゐらつしやいますね。』

『日本の婦人としては美しい方でせうな……日本にゐる頃から能く知つて居る人です。』

『旦那様と御一緒にゐらつしやるのですか。』

『いゝえ一人ですよ。』



『左様でゐらつしやいますか。』  
其語尾が妙に響いた。

何氣なく話してゐた荒尾も、忽ち千香子の質問の真意義を悟つたやう、微笑を浮べて、

『一人ぢやあるが………妙に感じちや不可せんよ。序でもあるし疑ひを受けても迷惑するから、念のために、私と彼女との關係を話したときませう。』

と、満枝との關係を、詳らかに語り聞かせた。

『如何です、これで明瞭に解つたでせう、は、は、は、』  
高く笑つた。千香子は寧ろ、寸間にても疑念を挾むた事の、不

謹慎を養るがやう、

『まあ、感心な方でゐらつしやいますね、然う言ふお方と知りま

したら、お知己のために、御紹介をお願い申せば宜しうござい  
ましたわね。』

『又御紹介する機会がありますよ、以前の赤橙満枝なら、共に齡  
ひすべき人間ぢやありませんから、決して御紹介はしませんか  
今日の赤橙満枝は、御紹介しても、毒にはならんぢやらうと思  
ひます。熱心と言ふものは恐るべきもので、今日訪ねて來たの  
も、美術展覧會へ出品したところが、審査の結果、展覧を許さ  
れたから、畫を觀に來て下れいと言つて、觀覽券を持つて來て  
下れたのです。』

卓の上にあつた、優待觀覽券を出して見せた。

『真箇感心な方でゐらつしやいますね、私しも拜觀に出かけます  
わ。』

『まだ、影管を把つてから、僅か一ケ年余りですから、眞箇感心ですちや。』

『天才であらつしやるんでせうね。』

『さあ、それは何うですか。』

(十五)

『御足勞かけて相濟まなかつたですね、實は急に御相談しなさいやならない事が出来したので、それでお呼立したので。』

『何か變つた事が出来したのでですか。』

子爵の顔を見たは荒尾であつた。

『變つた事と言へば變つた事だが、實は、私が急に歸朝を命ぜら

れたのだ。』

『左様ですか、何う言ふ事情で……』

『議會に於て、内閣不信任の上奏案が通過したものであるから、現内閣が總辭職をしたのだ。其結果葛城公爵が、大命を奉じて、後繼内閣を組織する事になつたために、外務大臣に親任される事になつたのだ。』

得意の色は、眉宇の邊に浮いてゐる。

『然うですか、それはお目出たい事ですな。』

『就いてはだ、成たけ早く歸朝して下れいと言ふ電命だから、來週の日曜に出發する豫定になつて居るのだから、千香子だけは此地へ殘して置いて、今少し勉強させる考へでゐますから、彼女の監督をお願いして置きたいと思つたので、それで御足勞を

かけたのです、御厄介であらうが、御承諾が願ひたいのです。』  
『御命令なら承諾は致しますが、お宿は何方へお定めになるんです。』

『願はれるなら、君の宿へ御一緒に願へば、勉強上の都合も、至極好いであらうと思ふけれど、それでは世間へ對して、君が迷惑であらうと考へたので、阿部参事官へ頼むで、世話をして貰う事にしましたのだ。』

『然うですか、それは結構です、さう言ふ確かな家庭にゐらつしやるんなら、別に私のやうな者に、監督する必要はないと思ひますが、しかし折角のお辭ですから、蔭ながらお世話は致します。』

『阿部と言ふ人は、人格品性に、高潔な男で、殊に妻君も賢夫

人だかから、内々君の事を話してあるから、千香子も君の宿を訪ねるだらうが、君も時々参事官の家を訪ねて遣つて下さい、今夜は君を阿部君御夫婦へ紹介して置きたいと思つて、晩餐を一緒にする事になつて居るから、いづれ後刻紹介します。』

『然うですか、それはお手數かけて濟ませんですな。』

『私は一緒に連れて歸る考へで居りましたが、千香子が今暫らくのたいと言ふものだから、それで残して置く事にしました、彼はもう婚約を結んだ氣で居るらしいから、君も其愈で、相當の地位を得られるまで、貞淑に待つて居つたら、失望させないやうにして遣つて下さい、此事だけは私から呉々も頼むで置きます。』

『栗羽家と結婚しても、他が怪まないだけの位地を得ましたら、

「飲んでお望みに従ひますが、しかし御良縁がありましたら、御懸念なく、他へ嫁かれても、少しの異存もありませんから、其邊は御随意に願つて置きます。」

「縁談はないではないが、彼女が承知しないから、皆な断つて了ひました。ツイ一昨日も、千香子の話に依ると、君も知つて居られるさうだが、富山唯繼の妻に遣らないかと言つて、田鶴見子爵から書面が來ましたが、それも昨日断りの書面を出したよ。」

笑ひながら語つた。

「へえ……富山唯繼は、破産して了つた筈ですが、まだ紳士の体面を保つて居りますかな。」

不審さうに言つた。

「内情は知らないが、左に右田鶴見子爵から、さう言つて來ました。」

「設令財産を恢復したとしても、彼の富山と言ふ男は、齡すべき人間ぢやないです、實に品性の陋劣な男ですからな。」

「然うだと言ふ事ですね……千香子からさう言ふ話を聞きましたよ。」

「話半へ千香子が來て、」

「お話中へ失禮ですけれど、阿部さんがお二人で入來しやいましたとございます。」

と知らせた。

「然うか、それでは私は失禮して、客室へ往くから、お前暫時荒尾さんのお相手をしてゐて下さい。」

『もう、晩餐のお支度が整つてゐますから、直にでもお宜しいのですよ。』

『それでは、十分も経つたら御案内申すが宜い。』

『はい、長まりましたでございます。』

子爵は、荒尾へ會釋して室を去つた。

千香子は嬉しさに椅子に倚つて、

『お聞遊ばしたでございますませうけれど、急に歸朝を命せられたのださうでございますよ。』

『然うぢやさうですな……しかし御榮轉ぢやから、お目出たいです。』

『有難う存じます、父は宜いかも存じませんが、私は迷惑致しますわ、両親が這様に早く歸國すると知れて居りましたら、

遙々來るのではなかつたのですけれど、内閣の御都合とは申しながら、眞箇困つて了ひましたわ。』

『お残りなさるのぢやさうですな。』

『はい、折角遙々参つたのですし、それに勉強も種々始めてるものですから、せめて修學致すまでと存じまして、私だけ残る事に致しましてございますから、何分にもお世話お願ひ致しますわ。』

子爵から貴女の監督を命じられたから、御迷惑でも監督しますぞ、は、は、は。』

『参事官を勤めてゐらつしやる、阿部さんのお宅へ御厄介になる事になつたさうですけど、貴方には、特別に御監督して頂くのださうですよ。』

『は、は、變つた監督もあつたもんですな。』

『今夜は阿部様御夫婦と御一緒に晩餐を差上げるのださうですから、もう十分以上経ちましたから、御案内申します、どうぞ彼方へ往らして下さいまし。』

『然うですか、それぢや列席致しませう。』

『どうぞ……』

千香子に導かれて、設けの食堂へ往つた。其處には子爵夫婦と相對して、既に阿部夫妻が席に就いてゐた。荒尾は阿部の隣席へ導かれて、千香子が相對して席に着いた。席が定まると子爵は、阿部夫妻と荒尾とを、互ひに紹介した。

而うして、芳醇の酒と、甘美の料理とは、順次運ばれて、主客共にいと打解けて、飲み且つ食するのであつた。

(十六)

栗羽子爵は、豫定の如く大使の任務を阿部參事官へ托して、家族と共に歸朝の途に就いた。千香子は其日から阿部家に寄宿する身となつた。

しかるに、大使館の外交官補に磯山信吉と言ふ、昨年外交官試験に及第して、十一月の下旬に赴任した、高等商業出身の青年紳士があつた。

年齢は二十九で、軀幹の高い、顔の圓い、餘り風采の揚らないが、極めて現代的な、氣障な男である。

この磯山は、赴任匆匆栗羽千香子を見て、心密かに戀の焰を燃やしてゐた。ために何うにかして千香子と、親しくならうと、心

を操るのであつたが、機會を得ないために、空しく悶えに悶えて今日に至つた。

ところが、栗羽子爵が外務大臣に親任されて、歸朝すると聞かや、千香子も共に歸朝するもののみ思ふて、失望落膽して居つたが、豊斗らんや、千香子は後に残つて、阿部家に寄宿する事になつたので、殆んど戀の希望が達したかのやう、歡び勇むのであつた。

ために、如何にもして阿部家に接近する手段を講じやうと、これまで、通常の參事官と外交官補として、日々の勤務の外、餘り親しく爲なかつた間柄でありながら、官海遊泳者の常として、位地を得るに従つて、己の勢力を作るべく、後進者をして、己の權力範圍に網羅するの、弊習あるを聞及んでゐる、磯山は、それ

を奇貨として阿部の歡心を得やうと覺悟した。

果せるかな、磯山の狙ひ的は、美事に的中して、首尾よく阿部の懷中に飛び込んで、信任を得ると共に、屢々阿部家の門を潜る身とはなつた。

阿部は極めて心事の高潔な男であるが、しかし、まだ漸く不惑の年齢を三ツ超えたばかりであるから、官海の常として、功名心は他知れず燃えてゐるのである。

しかるに最も信任を得てゐた、栗羽子爵が、外務大臣に轉任を命ぜられたために、心密かに、公使若くは幸好くば、大使に任命されるやも斗られぬ心があるので、他日の勢力を作るべく空想に耽りつゝあつた折柄へ、恰も好し磯山が、顯使に甘んせぬばかり聲の塵を拂ふ事に努むるので、磯山にかゝる野心ある事を知るべ

くもあらぬ阿部参事官は、遂に磯山を又なく信任するに至つたのである。

將を斃さんと欲せば、先づ馬を射よの格言を知る磯山は、阿部の懐中深く入ると共に、夫人由美子にも取入つて、何事が起つても、磯山を煩はすまでの信任を得たのであつた。

某日の事であつた。由美子夫人は、良人守人に對つて、

『ね貴方、磯山さんに、好い奥様を世話をしてあげたいと思ひますが、何處ぞお心當りはないんですか。』  
と問題を出した。

『私もさう思つて居るのだが、好いのはないか知ら……』

『あの通り貴方に信頼してゐるんですから、宜い妻君を見附けて媒酌して置けば、言はゞ貴方の乾分も同様で、他日大臣の椅子

にでもお就きなすつた時、甚麼に恃みになるか知れないと思ひますわ。』

『高等商業出身ではあるが、なか／＼の秀才だから、恩を被せて置けば、他日の都合は好いと思ふて居るが、何しろ妻を周旋すると言つても、此方では爲方がないではないか。』

『ですけれど、磯山さんの意見を聞いて見て、貰つても宜いと言ふ事なら、栗羽の奥様に頼むで、外交官志望の、令嬢の寫眞を送つて頂けば、寫眞を見ても極められない事はないではございませんか。』

『それは寫眞で極めても、極まらない事はないであらうが、しかし既に婚約が整ふて居るかも知れないから、磯山が來た時に、それとなくお前から意向を探つて見るが宜からう。』



『承知致してございます、それでは内々心中を探つて見る事に致しませう。』

『其上で、周旋を頼むと言ふ事なら、直に栗羽の奥様へ頼むで、五六枚寫眞を送つて貰うが宜い。』

辭の了るか丁らぬところへ、バイオリンの稽古に往つた千香子が歸つて来て、

『唯今歸りましたでございます。』

と淑がに挨拶して去つた。

『お嬢様があの言ふ譯でないかね、丁度好い縁談ですけれどね……』

『然うちや、丁度好い配偶だが、到底徒目だもう……』

ところへ、女中が入て来て、磯山の來訪した旨を告げた。二人

は顔見合せて、微笑を洩らしつゝ、

此方へ御案内するが宜い。』

守人が命じた。女中は畏みて立去つたが、直に磯山を案内して來た。見るより守人は、

『今君の噂をしてゐたところだ、まあ掛け給へ。』

『道理で、途中で噓が出ましたよ、屹度お誹りなすつたに相違ないでせう。』

調子を合せつゝ椅子に倚つた。

『いゝえ誹つたのではないんですよ、有望の外交官だつて、賞めてゐたのですわ。』

由美子夫人が笑ひつゝ言つた。

『何だか當にならないですね、噓が二つ出たのですからね。』

『それでは、實際の事をお話しますがね、貴方に良い奥様を媒酌したいと、良人へ相談してゐたところなんですよ、貴方もう奥様おありなさるんですか。』

『何う致しまして、御覽の通りの獨身者でございますから、何分にも宜しくお願ひ申します。』

『真箇なんですか。』

念を推すやうに問ねた、

『はい、真箇ですが、何處かに相應しいお心當りがお有んなさるでせうか。』

『それは在りますとも、いくらでもありますから、是非御周旋申したいと思ふのですが、定めて條件がおあんなさるでせうね。』

『真箇お世話を下さる御精神がおあんなさるなれば、恰ど幸ひで

すから、私の希望を打明けてお願ひする事に致したいと考へますが、真箇御周旋下さるでうか。』

『他のお方なれば、御免蒙るのですけれど、貴方のなれば、是非媒酌致したいと思つて、真箇良人と、其談話をしてゐましたのよ、ですから、お貰ひなさる御決心なれば、真箇お世話申しますわ。』

『では私に希望がありますから、腹藏なくお話致しませう、希望と言ふは他の事ではありませんが、お宅にゐらつしやる。栗羽さんの令嬢が、貰はれるなれば、御周旋が願ひたいと思ひますが、如何でせうか、他に婚約でもおあんなさるでせうか。』

阿部夫婦は、覺えず顔見合した。

『實は唯今も、其話をしてゐたのですよ。千香子さんなれば、好

一對の新夫婦が出来るのに残念な事だと申してね……」  
 『では、お嬢様は既に御婚約でもおあんなさるんでせうか。』  
 急き込むで問ねた。

この時まで二人の間答を、喫煙しつゝ聞いてゐた守人は、  
 『婚約が整つてゐるのだよ、それで無ければ無理にも栗羽さんへ  
 頼むで、御周旋するのだけれどもね、眞箇残念だよ。』  
 と説明した。

『然うですか……それは失望しましたね、して彌張外交官と御  
 婚約……』  
 守人が遮つて、

『いや外交官ではないさうだ、詳しい事は問ねもしなかつたけれ  
 ども、外交官でない事だけは確かな話なんだ。』

有繁に秘密を守つて、荒尾との事は言はなかつた。

『御婚約が整つて居るならば、いくら熱望しても、致方はいりま  
 せんから、断然思ひ切つて了ひます。』

如何にも残念さうに、失望の色は定かに見えた。

『なに貴方御失望なさるには及びませんわ、成程千香子さんは、  
 人並優れて美しくしてはゐらつしやいますけれど、彼の方に劣  
 らないだけの美人を御周旋致しますから私共夫婦に任せてお  
 置きなさいましよ、お望みに依つては、華族の令嬢なりと、官  
 吏の令嬢なりと、紳士紳商、お望みに任せて、御周旋申します  
 よ。』

剛ますやうに由美子が言つた。

『どうかお任せして置きますから、是非御周旋をお願い致します

先方の職業の如何は問はないですが、要するに、相當の教育があつて、美人ならば、それで宜いのです。』  
 『承知致しました、引受けて御周旋致しますから、暫時待つて下さいます。』

『何分にも宜しくお願い致します。』

とは言つたが、まだ思ひ諦められぬ様子で、

『……御婚約があるんですかね……』

呟くやうに繰返すのであつた。

室を隔つて、ヴァキオリンの音が、人の心をそゝるやうに聞え出した。

それは千香子が復習の彈奏であらう……。

(十七)

国立美術館内に開催された、美術競技展覧會の、某静物畫の前に立つて、餘念なく觀覽して居るのは、荒尾讓介と、栗羽千香子の兩人である。

荒尾は如何にも感心したやう、

『僅か一ケ年餘りの研究で、これだけの繪が描けるとは、或ひは天分かも知れないが、確に熱心の賜物ぢやと思ふのです、勵まなきやならないもんですな。』

『眞箇良く描けましてございますね、私共のやうな門外者には、彩筆の用ひ方なぞ分りかねますけれど、實物と少しも違はないやうに寫生してございますから、批點の打ちどころがございま

せんわ、なか／＼一ケ年や二ケ年に、繪らしい繪が描けるものではないやうに聞いて居りますが、これほどお描きになるところから見ますと、屹度天分の畫才がお在んなさるのでございませうね。」

評し合つて居るところへ、斗はず來合せたのは磯山外交官補であつた。戀ひ慕つてゐる千香子が、一人の紳士と、何事か語らひつゝ、繪を眺めて居るを見るや、意外に駭くと共に、男の顔を穴の開くほどに眺めて、早々に立去つて了つた。

けれども二人は氣の附かぬ様子で、尙も何事か語らひつゝ、やがて歸り去つた。

立去つたと見えた磯山は、いつの間にか又姿を願はして、二人の姿を目送しつゝ、

『あの男は何者か知ら……どうも様子が可怪い、あゝ言ふ男と一緒に歩いて居るのを、阿部さんでは知つてるのか知ら……』  
 豈夫彼れが婚約した男ではあるまいが、情夫か知ら……』  
 言ひつゝ、徐々と後を逐ふて出た。

『何うも情夫らしいね……婚約の男が此地にゐるなれば、阿部さんの家へ寄宿させなくとも、同棲する筈だからね、左に右一大秘密を發見したのだ、一番外交的手腕を、戀の問題に揮ふて見やうかね。』

人知れぬ微笑を浮べて、二人の後を、見えつ隠れつして尾けて往つた。

二人は、推列んで、睦まじさうに語らひつゝ、唯ある十字街に出たが、其處にて右と左へ別れて了つた。

磯山は男の何者なるかを確かめやうと、荒尾の後を、覺られぬやう尾行するのであつた。やがて荒尾は、唯ある下宿へ下つた。磯山は得たりと、標札を眺むるのであつた。標札には第三號室赤橙満枝と記してあつた。磯山は忽ち眉を繋めて、

『彼男が赤橙満枝が知ら、女のやうな名だね。』

赤橙、赤橙と繰返しつゝ、遂に立去つて了つた。

(十八)

翌日の朝であつた、阿部守人は、手に一葉の新聞紙を持つて、由美子夫人を其室に訪ふた。

『困つた事が出来たよ、昨日千香子さんは何處へか往かれたか』

お前知らないかい。』

言ひつゝ、椅子へ腰を掛けた。

由美子夫人は不安さうに、

『いゝえ、例のやうに御勉強に往らした外は、少しも存じないんですよ、何うか致しまして、』

『今朝の新聞に妙な事が出てゐるんだよ。』

『お嬢様の事がですか。』

『うむ。』

『何新聞へですか。』

『重立つた新聞には、大抵同じやうな記事が載つてゐるのだ。』

『へえ………妙ですね、何う言ふ事が記してあるんでございますか。』

『千香子さんが、赤橙と言ふ男と、開會中の美術競技展覽會を觀に往かれた記事が出て居るのだ。』

『へえ………赤橙なんて、聞いた事のない名ですが、誰の事でございますませうね。』

『私も聞いた事がないが、誰の事か知らと、不審に思つてるのだが……』

『唯それだけの記事なんですか。』

『それだけの記事なら、さほど困りもしないけれど、其赤橙と言ふ男は、千香子さんの情夫であるが、品性の下劣な男で、同國人が指彈するほどの放蕩者である事から、千香子さんには既に立派な婚約の紳士がある事や、栗羽大使の令嬢としては、あるまじき醜行だと、恚う言ふ事が記してあるんだ………私が監督を

頼まれてゐなければ、まだしも責任が輕いけれども、堅く監督を引受けてゐるのだから、栗羽さんへ對しては無論の事、栗羽さんと親交のある人々へ對して、申譯がないからね。』

由美子も駭き顔して、

『まあ、そんな事が書てあるんですか、駭きましたね、ですが、それは事實ある事でせうか。』

『さあ、火のない場所に煙は立たない理だから、いくらか事實があるのかも知れないね。』

當惑さうに言つた。

『お懶功であらつしやるから、豈夫そんな間違ひなどは有るまいと思つて、安心してゐましたけれど、日々あゝしてお稽古にお出かけなさるんですから、確かにない事とも斷言致しかねます

わね。』

『何うだ、千香子さんはまだゐられるだらうね。』

『はい、まだ居らつしやいますわ。』

『些つと此處へ呼んで下れないか、一度事實を問ねて見やう。』

『宜しうございます、直にお連れ申しますから、暫時待つてゐて下さいまし。』

と由美子は室を出た。

やがて千香子と共に入つて来た。守人はやゝ威容を整へて、先づ千香子へ席を與へた後、

『貴女はまだ、今朝の新聞を御覧なさらないのでですか。』  
千香子は不審さうに、

『まだ讀まないでございりますが、何にか變つた事でも出て居りま

すでございませうか。』

そこで守人は、新聞記事の一伍一什を物語つて聞かせた。  
すると千香子は顔色を變へて、

『まあ、那樣事が出てゐるのですか、駭きましたね……それは  
展覧會を見に行く事は行きましたけれど、赤橙なんと言ふ方と  
ではないのですよ、先日まだ父が此地にゐる頃の事ですが、父  
の用向で荒尾さんをお訪ねしました際に、美術展覧會を見に往  
かないかと誘はれて居りましたので、昨日御一緒に觀覽に出か  
けましたけれど、赤橙なんと言ふ人は、私すこしも存じません  
わ。』

『それでは荒尾君の事を、誰かゝ邪推して書たのかも知れないで  
すね。』



『どうも然うとより思へないのですけれど、それにしては、餘りに記事が捏造しすぎてあるではございせんか、お辭の通りであつて見れば、私共其赤權とか言ふ人と、何か怪しい關係でもあるかのやうに思はれます、のみならず、大層不品行者のやうに見えますけれど、私今日まで他から指を差されるやうな、暗い行爲をした覚えは少しもないのですから、眞箇迷惑しますわ……どうかして名譽を恢復する手段はないでございませうかね。』

『名譽恢復もですが、先づ第一の手段として、取消を請求すると共に、捏造の記事だと言ふ廣告を出すのですね、それより外に捷徑の手段はないと思ひます。』

『それでは、甚だ恐縮致しますが、早速手續を履行して頂きたう

ございますけれど、如何でございませうね。』

『承知致しました、早速其手續を履行致しませう。』

話半へ、女中が入つて来て、

『栗羽のお嬢様と、些つとお目に懸りたいと仰やつて、荒尾様が入来しやいましてでございます。』

と告げた。

すると阿部が、

『それは恰ど好い折柄だ、直に此方へお入來を願つては如何ですか。』

相談するが如く千香子に言つた。

『は、事に依りますと、新聞を御覧なすつて、其の事でお越しなすつたのかも知れないですから、此方へお入來を願つて、お差

支へがございませぬければ、然うして頂く事にお願ひ申しませう。」

『それでは、此方へ御案内申すが宜い。』  
女中に命じた。女中は畏まつて立去つたが、間もなく荒尾を導いて来た。

荒尾は主人夫婦へ町重な挨拶した後、千香子に向つて、  
『昨日は失禮致しました。』  
簡短な挨拶した。

『私こそ失禮いたしました。』  
『至急内々お伺ひ致たい事があつて来ました。お差支へがなければ、些つと別室で御意得たいですな。』  
言ふを阿部が引取るやうに、

『荒尾さん、申言して失禮ですが、御内談と仰やるのは、若や今朝の新聞記事に關しては、ないですか。』  
言つて返答を待つが如く、顔を噴めた。

『お察しの通り、其事に關してはすぢや。』  
『私も大方さうであらうと察したので、それがために、故々此方へ御案内させたのです、實は彼の記事に就いて、唯今相談しつゝあつた折柄ですが、まあどうかお掛け下さい。伺ひもしたり御相談も致したい事があるのですから……』  
『然うですか、では暫時失敬致します。』  
と椅子へ腰を下した。

『何うも怪しからぬ記事を掲載したではありませんか。』  
阿部が荒尾の心を讀むやうに言つた。

「實に捏造も茲に至つて極まれりです、それも信用のない小新聞でも書いたのなら、まだしもですが、有力な大新聞が、殆んど同一の筆法で掲載して居るのですから駭くのですちや、想ふに通信材料ちやらうと考へますが、其材料の出所が確かめたいと思ふです。」

「何にしても、お嬢様の御名譽に拘はる事ですから、取敢へず、取消を要求すると同時に、冤罪だと言ふ廣告を掲載しやうかと唯今相談しつゝ在つたのです。」

「ところが、此記事に就いては、少し思ひ當る事があるのです。と言ふのは、昨日私と千香子さんが、展覧會を出て歸りかけると、後から見え隠れに来る日本人があつたのです、私は深く心に止めないで、やがて千香子さんと別れまして、赤橙と信ふ

知人の家へ入つたのです、其時までも、件の男は私の跡を尾行してゐたのですが、私は知つて知らない風をして、赤橙の家へ入つてから、窓から覗いて見ると、入口に立つて櫃札を眺めて居りましたが、やがて立去つて了つたのです。言ひつゝ尙も。

「妙な男ちやとは思ひましたが、其時は疑問を残して、深くは心にかげなかつたですが、今日の新聞で見ると、千香子さんが、赤橙某と共に展覧會へ往かれたやうに書てありますから、扱は私の名が分らんために、後を尾けて来たところが、赤橙と言ふ標札のある家へ入つたものちやから、私を赤橙ちやと早合點をして、かゝる捏造の記事を、通信社へ投書したのちやなからうかと思ふのです。どうもそれでなければ、赤橙と言ふ名の出所

が知れないです。ちやから、この捏造記事の供給者は、必ず其尾行した日本人に相違あるまいと思ひますちや。』

『は……それで然うかも知れないですね、しかし其赤樫と言ふは、何をする人です。』

『それは赤樫滿枝と言ふ、女美術家で、現在這回的美術展覧會へ出品して居る人で、私も千香子さんも、其人の出品畫を觀に往つたのです。』

阿部は愈よ駭き顔に、

『赤樫と言ふは婦人ですか……この巴里に來てゐる紳士なら、大抵知らない人はないのだが、赤樫と言ふ姓は、聞いた覺がないから、誰の事か知らと思つてゐましたが、然う言ふ方では知らない筈だ。何は兎もあれ、事實が全然相違してゐるのだから

早速取消を請求すると同時に、何人か爲にする中傷の記事だと言ふ事を、掲載したけの新聞紙上へ廣告しやうと思ふが、貴方の御意見は如何でせう。』

『私も其事に就いて相談に來たのですが、差當りそれより外に取るべき手段はないでせうな。』

『それでは、今夜の夕刊、若くは明朝の紙上へ掲載させるやうに早速手續を履ませる事にしませう。』

『どうか、然う願ひたいものでな。』

『それでは、私は大使館へ往つて、取消文を認めて各社へ送る手續をしますから、暫時失禮します。』

『宜しくお願ひします。』

阿部は其まゝ、室を立去つた。すると由美子夫人は、千香子を慰